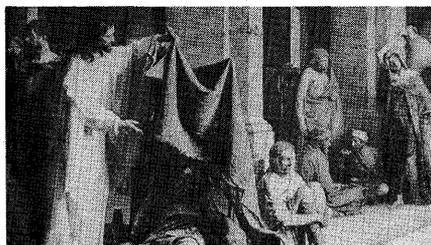
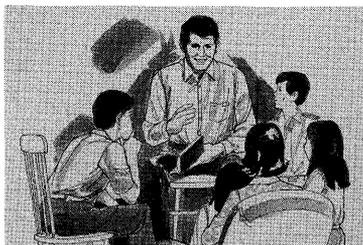


聖徒の道 8 1982





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バックナー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ベリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
ローレン・C・タン
レックス・D・ビネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー
F・エンツィオ・ブッシェ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：
ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：
デビッド・ミッチェル
子供の頁編集：
ボニー・ソーンダース
デザイナー：
ロジャー・ギリング
制作：
ノーマン・ブライス

も く じ

家庭にあつて福音を学ぶ……………	スペンサー・W・キンボール……………	1
主が父親たちに求められること…	ロバート・L・バックマン……………	8
網をおろして……………	デレック・ディクソン……………	14
質疑応答……………	トーマス・P・スミス ジョージ・D・ダラント……………	20
日々の恵み……………		26
心……………	ジャネット・トーマス……………	28
キンボール大管長、癒しの儀式 について語る……………	スペンサー・W・キンボール……………	40
かわってるっていいな……………	サンドラ・スカウソン……………	49
デビッド・O・マッケイ……………	ハワード・バグナー……………	52
ジェームズ・M・バラモア長老…	ジョリー・メレティス……………	54
より小さなお友だちへ		
ミツオシエのわけまえ……………	カイ・エル・ハーベイ……………	56
チャーチニュース/ローカルページ……………		59

1982年8月号 聖徒の道 第26巻第8号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-440-2351

制作・配送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
電話 03-427-4311

印刷所 株式会社 精興社
定 価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA 0482JA Printed in Tokyo, Japan.
© 1982 by the Corporation of the President of the Church of Jesus
Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

定期購読は、「聖徒の道用予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、
または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会・
東京ディストリビューション・センター 振替口座番号/東京0-
41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注:お届け先
の変更がありましたら、早急にTDCにご連絡下さい。

家庭にあって福音を学ぶ

大管長
スペンサー・W・キンボール



主は教会を通して、家族同士の一致と神への信仰を確たるものにするよう、特に強調して教えておられます。家庭の神聖な義務がないがしろにされ、子供の訓育が軽視されている時代にあつて、私たちが夫婦、親子、また親元を離れている独身者に対し、繰り返し強調していることがあります。それは、それぞれが自分の家庭の中の愛と一致をさらに強めるという点に特に留意して、真理の原則を学び、実生活に取り入れていくことが是非とも必要であるということです。そのような愛があるならば、この末日のサタンの熾烈な攻撃にも敗北を喫することはないでしょう。

予言者ジョセフ・スミスはモルモン経を

私たちの宗教のかなめ石であると言いましたが、その冒頭には、私たちが親としてどうあるべきかという点に関して、正しい原則が説かれています。「私すなわちニーファイは善い父母から生れたので……教えを受けた。」(I ニーファイ 1:1)

子供に福音の真理を教えることは、両親に与えられた神聖な務めです。私たちが先頃、以下の声明を全教会の聖餐会で読み上げるよう要請したのはそのためです。

「大管長会は、両親が子供たちに福音を教え、家族を強める最適の場として週一回開かれる、家庭の夕べの重要性をしばしば強調してきました。日曜日に家族で行なう福音の勉強のほかに、月曜日の夜は家庭の

夕べのために時間を取るようになして下さい。そこで福音の原則、愛、一致について教えたり、家族で活動を行なうようにするとよいでしょう。」

私たちは両親また指導者の方々はこの事柄について特に強調するように求めています。それは、天父に近い生活をし、常に靈性を保つことが、個人的にもまた一個の民としても欠かすことのできない大切な事柄だからです。真の末日聖徒の家庭は人生の嵐や苦闘に対する避け所です。靈性が生まれ育っていくのは、日々の祈り、聖典の学習、福音の教えに関する家族同士の語らいや活動、家庭の夕べ、家族会議、家族そろって行なう仕事、遊び、相互の助け合い、まわりの人々に福音を分かち合うことなどを通してです。また靈性を培うものとして、忍耐、他の人々への思いやりと赦し、家庭の中で福音の原則を実践することなども忘れてはなりません。家庭は福音が教えている義について精通し、福音の真理を共に学び、行なう場所なのです。

私は自分がまだ若い時代、そして妻や子供と共に過ごしてきた生活を振り返る時、家庭の中で、よく行なった楽しい活動のことを思い出します。天国は家庭の中にあつたのです。歌、ゲームの進行役、信仰箇条の朗読、物語、特技の発表、割り当てられた責任を果たすことなど、何を行なうにしても、一人一人がそれを通して成長し、良い気持ちを味わうことができました。

安息日、家庭の夕べ、またほかにも、週

日の活動などを計画する際に参考にできるよゝんという趣旨で教会から出された以下の提案を深く考え、祈りの気持ちをもって見直していただきたいと思います。

「安息日の計画の中に、家族が一緒に過ごす時間、また一人一人が聖典を学び、瞑想する時間、人々に奉仕する時間を加える」とよい。以下のような活動が考えられる。

聖典、『聖徒の道』大会特集号、教会発行の書籍を読む。予言者の生涯と教えを学ぶ。レッスンやその他、教会での責任を果たす準備をする。日記を書く。祈り、瞑想する。親戚や友人に手紙を書く。あるいは訪問する。宣教師に手紙を書く。精神を高揚させる音楽を楽しむ。家族そろって福音を学ぶ。家族会議を開く。夫婦の絆を強める。子供に本を読んでやる。系図の探求を行なう。

4代家族の記録を作成し、また家族の歴史や個人の歴史を書く。讃美歌を歌う。精神を高揚させる文学書を読む。芸術に対する理解を深める。家庭の夕べのレッスンや活動を計画する。その他の家族の活動を計画する。教会員でない人と友達になる。周囲の人々をフェロウシップする。病気の人や年老いた人、ひとり暮らしの人を訪問する。家族一人一人と個人面接を行なう。

月曜日の夜は家庭の夕べの時間とし、家族全員が楽しめる有意義な活動を計画する。家族を一致させ、互いの愛を強め、義しい生活をするように促す活動であれば、どのようなものでもよい。以下のような活動が考えられる。

安息日の活動として提案された事柄を行なう。『家庭の夕べ』のテキストを使ってレッスンを行なう。家族みんなで楽しめるゲームをする。文化的な催しに出かける。家族で一緒に奉仕活動を行なう。家族でそれぞれの才能を分かち合う。家をきれいにする。家庭菜園の手入れをする。家庭貯蔵品の目録を作る。食糧の貯蔵計画を立てる。家庭における生産の計画を立てる。休日や特別活動のための計画を立てる。家族会議を開く。健康管理プログラムの計画を立てる。あるいは実施する。教会員でない友人をフェローシップする。レクリエーション活動を行なう。」(パンフレット「家族一福音を基とした家庭を築くための提案」pp. 2-3)

上記の提案を祈りの気持ちをもって考慮すれば、家族を指導していく立場にある人は賢明で靈感に基づいた決定を下すことができるでしょう。私たちは独身者、夫婦、そして親、子供たちがこれらの目的を達成するために、安息日の統合プログラムによって生じた時間を用いるように望むものです。子供に福音を教えたり、家族同士で学び合ったりする上で基本となることは、福音を実生活で正しく実践することです。礼拝、学習、話し合い、そして義にかなった目的を達成し、ふさわしい活動を行なう日曜日、また、共に集って家族の活動、話し合いなど必要とされるすべての正しい事柄を行なう月曜日、この2日間にもたらされる影響力は何と大きいことでしょうか。



天父に近い生活をし、
常に靈性を保つことが、
個人的にもまた一個の民としても
欠かすことのできない
大切な事柄だからです。



この大切な時間帯をみたまの導きの下に過ごし、また、すべての生活時間を柔軟に用いられるよう勧告致します。

提案にあるような活動はすべて、家族の一致をさらに強めるために靈的に偏ることのないように調整されたものですが、重要性において皆同じであるというわけではありません。優先順位が他に先行するものもあります。ニーファイの次の言葉が思い出されます。「私たちはキリストのことを話し、キリストのことを喜び、キリストのことを説教し、キリストのことを予言し、また私たちの子孫にどこに……求めるかを知らせるために……。」(II ニーファイ 25: 26) 主とその教えが、導きや正しい模範や助けを与えてくれる大きな源であることを理解したならば、一人一人の内に何と大きな力が宿ることでしょう。これこそ私たちが家庭

の中で教えるべき最も重要な目標なのです。

天父は、私たちが家庭内外での非常に大切な活動をうまく進めていけるように、祈りという祝福を授けて下さいました。朝起きた時、夜寝る時、そして食卓を囲む時、個人的に、また家族全員で熱心に正しい祈りを捧げるなら、神に喜ばれる者としてさらに強く一致するだけでなく、靈的にも成長することでしょう。福音の真理を学び、実践しようとするにしても、人生の岐路に立って導きを求めるにしても、私たちにはどうしても天父の助けが必要です。家庭は子供たちが両親の祈りに耳を傾けながら、天父にどう話しかけたらよいかを学んで行く場ですが、家庭の中にあっては特にそのことが言えます。子供たちは家族の祈りを通して、偽りのない心からの祈りを学ぶのです。

個人的な、また家族そろっての聖典の学習は、福音を身につける上で最も基本となるものです。日々聖典を学び、それについて共に論じ合うことは、無知とサタンの誘惑に抗するための強力な武器であると長い間教えられてきました。この習慣によって私たちは大きな幸せを得、家族が主を愛し、その恵みに感謝する気持ちを抱くようになります。

私たちは家庭を治めることに関して、家族会議こそ、教会の評議会でも最も重要なものであるという確かな教えを受けてきました。親同士も互いに話し合う必要がありますが、家族会議では、両親の指導の下に家



子供に福音を教えたり、
家族同士で学び合ったりする上で
基本となることは、
福音を実生活で
正しく実践することです。



庭内の問題や家計の状態について話し合い、活動の計画をし、また家族を励まし強めるのです。教会から出された声明の中に述べられていることですが、「これらの集いが成功するか否かは、人の言うことに積極的に耳を傾ける姿勢と、包み隠しのない語らい、他の人の意見や考えを尊重することにかかっています。」

再度訴えたいことがあります。それは、聞き届けられた祈り、主の導き、癒しの儀式、特別な体験など、人生の中にあつた靈的な出来事と個人の経歴を記録することです。家族の集いや話し合いの時に、これらの記録の中から信仰を鼓舞させるのに格好な物語を引用することもできます。自分自身や先祖の歩みの中から取った靈的な話は、聖典あるいは歴史中の物語同様、家族を教えるための強力な武器となります。日記や

個人の記録は、書いた人自身はもとより、連れ合いや子、孫、その他あらゆる時代の人々の尽きせぬ靈感の泉となることを約束します。

家族の集い、会議の時に、伝道、系図、福祉など家族として行なうべき大切な活動について話し合いを持たれるよう、両親の方々に勧められるものです。父親、母親は子供たちが伝道に出たいという気持ちを起こすよう訓練する義務があります。また、肉体的な健康を初め、事情が許すならば、後には両親自身も伝道に出る日を目指して心構えをすることができます。伝道の業の大切さについて主は繰り返し述べておられます。「さて見よ、われ今汝に告ぐ、すなわち汝にとりて最も価値あることは、汝今の代の人々に悔改めを宣べて人々をわれに導き……」（教義と聖約15：6）

私たちはそれぞれの家庭にあって、周囲の人々に福音を伝える機会が与えられるように祈る必要があります。また福音がより大きな力と勢いをもって進み行き、今よりも多くの国々、そして受け入れる備えのできたさらに多くの人々の心の中に達するよう、その道が開かれるように引き続き主に祈り求めなければなりません。

もしも私たちが家庭のために作られた教会のプログラムに従うならば、今まで述べたような事柄を祈りをもって、しかも真剣に生活に取り入れる人にはすべて、大いなる祝福がもたらされるでしょう。これは古代の予言者の約束であり、また私たちの約

束でもあります。私たちは予言者モーセの知恵に満ちた教えを覚えています。イスラエルの民がもしその教えに従っていたら、背信がもたらすそれとは全く異なった結果が出ていたことでしょう。「きょう、わたしがあなたに命じるこれらの言葉をあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない。」（申命6：6—7）

しかし、時々次のような言い訳をする人々がいます。「時間がないんです。」「月曜日にはほかにすることがあります。」「この年になって今さらレッスンというのもねえ。」「うちの子供はまだ小さ過ぎて理解できませんよ。」「学校の勉強が第一ですよ。」「子供を皆集めるのは大変なんです。」「そんなに堅苦しくしなくてもほかに方法があるでしょう。」「私は私です。そんなもの必要ありません。」「テレビの特別番組があるんです。」

主は非常に力ある御方ですが、私たち人間はとても弱い者です。主はすべてのことを御存じですが、私たちにはごくわずかのことしか判断できません。それでもなお主の教えに従おうとしないのでしょうか。次の聖句を御存じのことと思います。「ある者は戦車を誇り、ある者は馬を誇る。しかしわれらは、われらの神、主のみ名を誇る。彼らのはかがみ、また倒れる。しかしわれらは起きて、まっすぐに立つ。」（詩篇20：7—8）



日々聖典を学び、
それについて共に論じ合うことは、
無知とサタンの誘惑に抗するための
強力な武器であると
長い間教えられてきました。



神は私たちの父であり、私たちは神の子供です。主は私たちに戒めを与えられました。私たちはその道に従わなければなりません。家庭における正しい生活と適切な活動、みたまの導きの下に教えられる福音の真理、両親の賢明な指導、父親による管理、両親の話し合い、これこそ現代の様々な病弊に対する治療法であり、家庭内の問題を癒すための手段です。

しかし、特に努力を要する事柄については、続けてその問題に取り組んでいかなければ、決して良い結果は得られません。家族の一人一人が無条件の愛を身につけるように求められます。使徒パウロは両親により勧告を与えました。「父たる者よ、子供をいらだたせてはいけぬ。心がいじけるかも知れないから。」(コロサイ 3 : 21)

主は予言者ジョセフ・スミスに、両親、教会の指導者、教師が自分の管理下にある人々にどのような態度で接するべきか、鍵となる事柄を啓示されました。「如何なる権力も勢力も、神権によりて維持する能わず、または維持すべきものにあらず、ただ説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによる。」(教義と聖約121 : 41—42)

福音の真理を学び、実践するのは、まず家庭からでなければなりません。それについてのジョセフ・F・スミス大管長の言葉を見てみましょう。「父親の皆さん、もしあなたが子供を福音の原則のうちに教えたいと思うならば、また子供に真理を愛し、理解させたいと思うならば、さらにあなたに従順であつて一致して欲しいと思うならば、子供を愛しなさい。そしてあらゆる言葉と行ないによって、あなたが愛していることを証明しなさい。あなたのために、あなたと息子たちの間になくしてはならない愛のために、たとえ息子たちがわがままであつても、彼らに話す時、怒つてはならない。命令調で荒々しく話してはならない。優しく話しなさい。もし必要ならばひざまずかせ、共に泣きなさい。できれば共に涙を流しなさい。息子の心を和ませなさい。あなたに対して優しい気持ちを抱かせなさい。むちや暴力を用いず、説服と偽らざる愛をもって論理的に話し合いなさい。このようにして子供たちを掌中に収めることができなるとすれば……子供を収める方法は世の中になくなくなるであろう。」(「福音の教義」pp.

305—306)

救い主はそのための方法を次のように教えて下さいました。「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」

(ヨハネ13：34)

行動と動機の中にこうした愛の精神があれば、ペテロが述べた次の祝福は両親の上に留まるでしょう。「何よりもまず、互の愛を熱く保ちなさい。愛は多くの罪をおおものである。」(I ペテロ 4：8)

また、両親が自分を心から愛していることを理解している子供は、親の「誠実は死のきずなよりも強きこと」(教義と聖約121：44)を自分の体験によって知り、親の欠点を赦せるようになるでしょう。

「互に情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互にゆるし合いなさい」(エペソ 4：32)と聖典には書かれています。私たちの家庭がそのような場であるならば、また家族の集いや話し合いを行ない、愛を第一の動機として祈り、働き、行動し、人々に福音を伝え、ほかに主のみこころを行なうように努めているとしたら、家族の一人一人に生涯変わらぬ力をもたらす高い霊性と強い一致が与えられるでしょう。

一人一人の教会員に、またすべての家族に強くお勧めします。以上の真理をどれほど生活の中に取り入れているか振り返って

みて下さい。福音の実践は現代の悪への盾となり、守りとなります。そして、現世においても来世においてもすべての人、家族に尽きせぬ喜びをもたらすのです。



ホームティーチャーへの提案

1. 家庭の夕べなど家族一緒の活動を通して得た祝福について証する。担当家族に、同じような体験や思いを味わったことはないか尋ねる。
2. このメッセージの中に、声に出して読んだり、話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3. このメッセージの中で提案されている日曜日と月曜日の活動の関連性について話し合う。どちらも大切であると言われているが、それはなぜか。事前の計画、またそれぞれの実情に合った活動の選択が大切なのはなぜだろうか。
4. 家族が共に過ごす時間を質的にさらに向上させるにはどうしたらよいかを話し合う。家族同士の話し合い、活動をより意義あるものとするために、一人一人にできることは何だろうか。
5. 訪問する前に家長と話し合っておくことにより、この話し合いをさらに充実したものとするのができないだろうか。家族を教えることについて、定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

主が父親たちに求められること

父親として教え、模範を示し、しつけ、愛を示す責任

七十人第一定員会会員 ロバート・L・バックマン

あ まりに多くの父親が、少年から大人への過渡期であるあのやっかいな思春期というものがどのようなものであるかを忘れてしまっています。この時期にはいろいろなことがあります。自我や人生の目的についての模索。体の成長に関する悩み。自分の将来や仕事、ガールフレンドについての大切な決定、神、イエス・キリスト、仲間とのつながりに関する決定。信仰を持っているが疑いの心があり、自立しているようで自立していない状態。自分の力を試してみたいと思いつながら、どこかに安らぎの場を求めてたたずむ自分。家族や仲間、教師、指導者などあらゆる人の影響を受けて、ここかしこになびく心。これらはすべてその時の感情によって複雑にからみ合い、とどまることを知りません。

あなたはこのような経験をしてきたことを覚えていますか。

天の御父は、子供の永遠の行く末を両親の手、いやもっと厳密には家族の肩に託しておられるのです。この責任を人に委任することはできません。

ジョセフ・スミスを通して与えられた美しい啓示の中で、主は幼子には罪がなく、彼らに対しては「その父たる者に大いなる事求めらるる」(教義と聖約29:48)と云われました。

主が父たる者に求められる大いなることとは何でしょうか。中央若い男性会長とし

て、青少年の子供をお持ちの父親の皆さんにお話したいと思います。

主は教えるよう求めておられる

父親の皆さん、子供たちを光明と真理の中に導き来れという主の下された^負れ多い責任を、どうして忘れることができるでしょう。

教義と聖約68:25-28の中で、主は家長としての責任をはっきりと示しておられます。主は私たちにこう命じられました。

1. 子供が福音の第一原則を理解できるようにする。
2. 8歳になったらバプテスマを受け、「按手により」聖霊を受けられるようにする。
3. 「祈ることと、主の前に正しく歩むこと」を実行できるようにする。

主は、これは「シオン……に住める者の律法」であると明言しておられます。

子供がまだ小さく、サタンの影響にさらされる前に、しかも両親が一生のうち最もたくましく生きている時期に、子供を教えるべく理解させなさいと言われたことは、何と興味深いことでしょう。

また、子供に真理を教える責任は、教会や学校、特定の機関、人に委ねることができないことを心に銘記して下さい。

子供が正しい選択ができるように助ける

ことは、親の責任であるとともに権利でもあるのです。これは神の道徳律の中の神聖な事柄（結婚や性、誕生など）について教える時に、特に言えることです。ほとんどの場合、青少年たちはこれらの知識を教室の興味本位の話を通じて友達から得ているのです。これでは盲人が盲人の手を引いているようなものです。

私の知っている人に、息子と本当に素晴らしい関係を築いている父親がいます。ふたりの間には好ましい意思の疎通があり、

美しい信頼の絆で結ばれていました。夏のある日、庭仕事をしていた父親は、たまたま塀の向こう側で友達と話していた息子の声を聞きました。その友達は、成長するにつれて私たちのだれもが悩む問題について息子の意見を求めていました。息子はその質問には答えずに、こう言ったのです。「そのことはお父さんに聞いてみたら。」すると友達はこう言いました。「君はこんなことがお父さんに話せるのかい？」

神の道徳律を破った若者と面接する時に



主は、子供がまだ小さく、サタンの影響にさらされる前に、子供を教えるべく理解させなさいと言われました。





山のあちこちを歩きながら学んだことを心に留めておけば、人生の旅も最後まで立派に歩み続けられると信じています。



いつも思うのは、彼らが父親と意思を通じ合っており、道徳についていつも教えを受けていたら、彼らの多くがああ夢をめちゃめちゃにしてしまうような経験をしなくてすんだらうとということです。

今日の両親がアダムとイヴのようになったらどんなによいでしょう。彼らは「息子娘らにすべての事を知らしめたり」（モーセ 5：12）と聖典には書いてあります。

父親は何らかの方法で、機会をとらえて教えるようにしなければなりませんし、時にはその機会を作り出すことも必要です。時間のかかることですが、子供と好ましい関係を築き、実のある会話をするように努めて下さい。

先頃、イーグルスカウトの表彰夕食会で、あるイーグルスカウトが、彼の隊長である献身的な父親との結びつきについて話すのを聞きました。

「旅行中、ぼくたちの隊長は進歩記事についてではなく別のことをいろいろ話してくれました。歩きながらパウロについて話し、キャンプファイヤーを囲みながらニーファイについて話し、星をながめながらアブラハムのことを、夜の祈りの前にはナザレのイエスのことを話してくれました。また、いろいろな時に、ぼくたち一人一人を独りにさせてくれ、ジョセフ・スミスが祈ったように、ひとりで祈る機会を与えてくれました。

ぼくは隊長の話に熱心に耳を傾け、言われたことを実行してみようと思いました。実は、隊長は僕の父です。僕は父のようになりたいと思います。

山のあちこちを歩きながら学んだことを心に留めておけば、人生の旅も最後まで立派に歩み続けられると信じています。」

主は模範を示すよう求めておられる

救い主は模範の大切さについてこう述べておられます。「よくよくあなたがたに言うておく。子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることはできない。父のなさることであればすべて、子どもそのとおりにするのである。」（ヨハネ 5：19）

すべての末日聖徒の家族は、神権を義しく行使し、よき模範を示し、信仰と献身によって家族を守り、強めてくれる家長に導かれる権利があります。

親は子供に高い標準と本当に価値あるものを教える義務があります。これらは親の模範によって伝えるのが一番です。

デビッド・O・マッケイ大管長は、両親にこうアドバイスしています。「家庭で福音

を教えるのに最も効果的な方法は、口で説くことではなく、実践することである。神を信じることを教えようとするなら、あなた自身が神に信仰を示すのがよい。祈ることを教えようとするなら、あなた自身が祈りを実践するのがよい。子供にアルコール飲料を飲まないで欲しいと思っているだろうか。それなら、あなた自身がそれを口にしないことである。子供に、徳高く、節度のある好ましい生活をさせたいと思うなら、これらの面で価値ある模範を子供に示すことである。このような家庭環境の中で育った子供は、13-14歳になって宗教的な目覚めが訪れた時、心をかき乱す疑惑の念や何かへのあこがれをきっぱりとはねのける強さを身につけることができるであろう。」(Conference Report「大会報告」1955年4月, p.27)

あなたは日々の生活の中で、主と福音を大切にしていることを態度に示していますか。妻や子供に愛を示していますか。家庭の中であって家長としての権威を行使していますか。最近、子供に父親の祝福を授けたのはいつですか。子供たちの相談にのったのはいつですか。子供たちに証をしたのは最近ではいつですか。家族で定期的に聖典の勉強をしていますか。家族の祈りや家庭の夕べは行なっていますか。家庭の中に、福音の精神が感じられますか。よい模範を示していますか。

すべての父親が家族に向かってこう言えるようになっていただきたいと思います。「私がキリストに従うように、私について来なさい」と。

父親は子供が自由意志を行使できる 範囲を定める

家庭でリーダーシップをとるのは父親と母親でなければなりません。最近の米国連合通信者向けの記事の中で、ジョン・バーはこう書いています。「専門家たちは異口同音にこう述べている。家庭で身につけた明確な教えこそ、子供にとって一番の支えとなる。」

若人はあてもなく漂いたいとは思っていません。彼らは安全な場所、しっかりとした錨、樁、指針となる決まり、しかも達成可能なものを望んでいます。また、自分に何が期待されているのかを知りたいと思い、その方向づけを心から求めています。

私たちの中には、自分にないものを子供に与えたいと思うあまり、持っているもの、すなわち家族の絆を与えることを忘れてしまっている人がいます。

主は愛を示すよう求めておられる

カンザスの高校生1万人に、両親に尋ねてみたいこと、両親の卒直な答えが知りたいと思っていることは何かと質問したところ、80パーセントが「私を愛していますか」という答えでした。

次に多かった答えは、「生まれ変われるとしたら、また私のような子供が欲しいですか」という質問でした。

父親が子供たちに、自分は価値ある者なのだと思わせ、愛されている子供、必要とされている子供であると感じさせることは、何よりも大切です。

救い主が私たちを愛して下さるように、私たちは無条件に子供を愛する必要がある



父親は子供が8歳になったらバプテスマを受け、「按手により」聖霊を受けられるように導く必要がある。



ます。時間や体力、能力、理解力、関心を惜しみなく使って愛を示し、彼らが愛する天父とのかかわりに気づき、神の子としての限りない可能性に目覚めることができるように助けていただきたいのです。

ジョセフ・F・スミス大管長は私たちにこう勧告しています。

「父親の皆さん、もしあなたが子供を福音の原則のうちに教えたいと思うならば、また子供に真理を愛し、理解させたいと思うならば、さらにあなたに従順であって一致して欲しいと思うならば、子供を愛なさい。そしてあらゆる言葉と行ないによって、あなたが愛していることを証明しなさい。あなたのために、あなたと息子たちの間になくしてはならない愛のために、たとえ息子たちがわがままであっても、彼らに話す時、怒ってはならない。命令調で荒々しく話してはならない。やさしく話しなさい。

もし必要ならばひざまずかせ、共に泣きなさい。できれば共に涙を流しなさい。息子の心を和ませなさい。あなたに対してやさしい気持ちを抱かせなさい。むちや暴力を用いず、説服と偽らざる愛をもって論理的に話し合いなさい。このようにして子供たちを掌中に収めることができないとすれば、子供たちをとがめてよい。そして子供を治める方法は世の中に全くなくなるであろう。」
（「福音の教義」pp.305—306）

主は父親が英雄になることを 求めておられる

1976年4月の総大会の神権部会で、スペンサー・W・キンボール大管長はウォルター・マクビークの言葉を引用してこう述べています。

「子供たちには、リンカーンやワシントンのような英雄が大勢必要である。しかし同時に、身近にも英雄を必要としている。子供たち一人一人が、気高い強さと心底から高潔さを持つ人を知る必要がある。そのような人々に路上で出会い、共にハイキングやキャンプに行き、また毎日毎日身近な所で会う必要がある。いつでも質問ができる程、身近に感じ、腹藏なく心行くまで話をする必要がある。」（「聖徒の道」1976年8月号、p.360）

福音にあって、このような英雄は父親がなるべきものです。

一昔前は、男の子は父親の助け手として一緒に畑で働いたものです。また、商売の見習いとして人々の中で働いていました。しかし現在の都会化社会では、男の子は概して土と親しむことがなくなり、男同士の社会というものから遠ざかっています。し

かも、父親たちは朝早く会社に出かけ、夜遅くならないと帰って来ません。その結果、少年たちの多くが一日の大半を、男らしさの模範のない世界に置きざりにされているのです。

当然のことながら、父親のいない家庭もあります。父親の役割も兼ねなければならぬ母親の方は失望するに及びません。愛し個人的な関心を向けること、男の子に対する特別な助言、大人の男性と共に働き、遊ぶ機会、これらはすべて教会が助けてくれ、息子が男性としての役割を果たせるように備えてくれるでしょう。立派な母親が子供に与え得る力を過小評価してはなりません。

しかし、父親がそばにいる場合、父親に与えられた基本的なチャレンジは、子供と過ごす時間を最も有意義なひとときとし、彼らの人生を豊かで実りあるものとする方法を教えることです。父親の皆さん、子供ともっと接するようにしましょう。そして、子供たちが福音の証を得るとか、自己達成賞を得る、伝道、神殿結婚、関心のある職業といったことに関して価値ある目標を定めることができるよう助けてあげてください。目標が定まったら、次にそれが達成できるよう援助を与えて下さい。子供を励まし、後押しをし、導きを与えて下さい。また、傍にあって、彼らのすることを支援し、子供たちの社会にも積極的に顔を出し、一緒にキャンプに行き、彼らのすることに関心を示していただきたいのです。

子供のために祈ってください。神への信仰を築き、祈りを通して答えを得ようとしている子供に、「君のために祈っているんだよ」と言ってあげてください。

父親の祈りがどれほど力あるものかは、反抗する息子のために嘆願した父アルマの

祈りによく示されています。

「見よ、主はすでにその聖徒らの祈りも神の僕である汝の父アルマの祈りも聞きとどけたもうた。汝の父は汝に真理を知らせようとして堅い信仰をもって汝のために祈った。それであるから、神の僕たちの祈りがそれぞれの信仰に応じて聞きとどけられるよう、われは神の権能と威力とを汝に認めさせるために来たのである。」(モーサヤ 27:14)

私たち父親の祈りが、ダビデが息子ソロモンのために祈った時のように熱烈な祈りでありますように。「またわが子ソロモンに心をつくしてあなたの命令と、あなたのあかしと、あなたのさだめとを守らせて、これをことごとく行わせ、わたしが備えをした宮を建てさせてください。」(歴代上29:19)

父親とは、男性の受けることのできる最も尊い称号です。それには、生物学的な役割以上のものがあります。父親とは、家長、指導者、模範、信頼のおける人、教師、英雄、友、そして究極的には完全な人を示しています。

主は父親に大きなことを求めておられますが、その報いもまた大きいことを忘れないうで下さい。子供たちが成長して、確固とした福音の証を持ち、神殿結婚をして、主の召しに応え、自分の子供を持って彼らを光明と真理のうちに導き、献身的な働きによって社会にその足跡を残す時に、私たちは自らの責任をまっとうしたことを知り、天で味わうような喜びに浸ることができるのです。そして、わずかではあっても、天の御父が御子のことを「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」(マタイ3:17)と言って紹介された時の思いが理解できるようになるのです。

網をおろして

デレック・ディクソン



金 曜日の夜、私たちは支部長会を開いていました。書記をしている兄弟が語気を強めて言いました。「私たちが顔も知らないお休み会員の会員記録がかなりあります。これさえなければ、報告書にもっと良い数字が出てくるんです。何かいい手がないでしょうか。教会に来なくなって30年以上という家族も幾つかあります。来る気が全然ないんです。」

副支部長たちがその点について書記と話し合いを始めたのですが、支部長の私はしばらく彼らの話を聞きながら、かつてはそのような状態で苦しみの中にあった自分の家庭のことを思い浮かべていました。

10歳の時でした。好奇心の塊だった私はある日両親の寝室に入り込み、父の整理たんすの一番下の引き出しの中を引っかき回していました。1冊の本が手に触れました。黒い装丁で、中は全頁2段組みになっていました。聖書のような感じがしましたが、そうではありませんでした。聖書は学校で何度も見たことがありました。

中を開くと、赤い線を引いた部分が目に入りました。私はその中の何箇所かを読んできました。そして次のところを読んだ時には本当に驚きました。

「レーマン人は頭の毛をそり、腰に毛皮をまとい、よろいを着け弓、矢、^{投げ}石器^{投げ}などを持っているだけでほとんどはかであった。

レーマン人の皮膚は先祖につけられたし

◀ある日両親の寝室に入り込み、父の整理たんすの一番下の引き出しの中を引っかき回していました。

るのように黒かった。」(アルマ3:5-6)

「インディアンだ！アメリカインディアンだぞ、これは！」その箇所は私の心を捕らえて離しませんでした。私はもう一度そこを読み返し、思い巡らしてみました。それからしばらくの間、幾つか他の箇所を読んでいると、兄の呼ぶ声がし、私はその本を注意深く元あった所に戻しました。そして20年後に再び手にするまで、その本のことは完全に忘れていました。

第二次大戦が始まり、日用品を買うために店の前に並ぶ人々の長い列、配給手帳、乏しい燃料などの、気がめいるような暗い日々が続きました。親たちは戦時下の苦しい生活に追われ、放っておかれた子供たちの間には非行の種がまかれました。学校はすし詰め教室で、退職した元教師が再び教壇に駆り出されていました。授業を終えてだれもいない家に戻った子供たちを待っているのは、朝食に使った食器の後始末と空腹を満たすために自分で何か食事の準備をすることでした。

子供たちにとっては寂しい時代でした。混乱した戦争の時代、親は親の道を、子供は子供の道を歩くのが精一杯で、心を通い合わせる時間などはほとんどありませんでした。

そして月日が流れました。私は1年とちょっとの間、入院生活を送りました。退院して家に戻って来た時は21歳、職にも就いていませんでしたが、何とか結婚したいと考えていました。広い世の中、仕事のひとつくらいと甘く考えていたのです。

しかし、ことは思うように運びませんでした。まだまだ世の中の状況は厳しかったのです。当時母は療養所のやっかいになっ

ていて、私は悪性のろく膜炎から快復の方向に向かいつつあった兄と一緒に家にいました。父も家にいる時はめったになく、ちょっと暇ができて、療養所の母のところに行くのが常でした。もうひとり、まだ学校に通っていた妹がいましたが、顔色が悪く、その上無口で笑い顔を見せたことなどほとんどありませんでした。

私の毎日は、読書や散歩、病院にいる友人に手紙を書く、そんなものでした。そのほかには何の目的もないつらな日々が続き、心が満たされるということはありませんでした。ある4月の昼下り、玄関のドアをノックする音がしました。私が出ると地味なオーバーと帽子に身を包んだふたりの男の人がそこに立っていました。

「失礼します。こちらはブラディーさんのお宅でしょうか。」

「はい、そうです。」

「失礼ですが、ヘンリー・ウィリアム・ブラディーさんでいらっしゃいますか。」

「いいえ、私は息子です。父は今仕事で不在にしておりますが、どのような御用件でしょうか。」

「そうですか。実は私たちはあなたのお父さんと同じ教会の者なのですが、教会の記録を調べておりましたところ、こちらに住んでおられるということがわかったものですから、こししばらく音信がなかったもので、どうしていらっしゃるかと思いましたが、訪問させていただきました。」

「ああ、そうでしたか。父は今とても慌ただしく大変な生活をしているんですが、変ですね、私の覚えてる限りでは、父はこの21年間どこの教会にも行っていませんよ。

どこの教会なんですか。」

「末日聖徒イエス・キリスト教会です。あなたのお父さんはその教会の執事です。随分教会には来ていらっしゃるかもしれませんが、会員であることに変わりはありません。教会についてお父さんからお聞きになったことはありませんか。」

「一度もありませんよ。」

「お父さんの教会について、もっと知りたいと思いませんか。」

「ぜひ教えて下さい。とても興味があります。」

「きょうはこれから別の所へ行く約束がありますので、どうでしょう、明日4時に私たちの教会でということ。」

イエス・キリストの福音を初めて聞いたそのレッスンは、英国バーミンガム市のブーストリートにある古びた建物の中で行なわれました。神会というテーマの下に行なわれたそのレッスンを聞いて、私は心の中に喜びを覚えました。レッスンが終わった時、「ジョセフ・スミス物語」という小さなパンフレットをもらい、家に持って返りましたが、兄のベッドの所でそれを落としました。兄はそれを拾い上げると、食い入るような目つきで読み、もう一度読むのだと自分でさっさと片づけてしまいました。

二度目のレッスンでは祈りの仕方を学びました。天父に話しかけるというまったく初めての経験に、私は手の平にじっとりと汗をかき、顔を紅潮させながら、つかえつかえどもるようにして祈りの言葉を継いでいきました。そしてまた別のパンフレットをもらって家に帰りましたが、前の時と同様すぐに私の前からは姿を消してしまいま

した。

3回目のレッスンではモルモン経について学びました。宣教師はモルモン経が神のみ言葉を載せた書物であるとの心からの証をし、それを私にくれました。私はちょっとした間手にとってながめてみましたが、すぐに宣教師に返しました。

彼はびっくりして、「読みたくないんですか」と聞いてきました。

「いえ、その反対です。でも、父が持っているのを貸してもらおうと思います。」

「お父さんはモルモン経を持ってるんですか。」

「ええ、確か持ってるはずです。」

夕食の時、家族は皆、黙って食物を口に運んでいましたが、私は思い切って父に尋

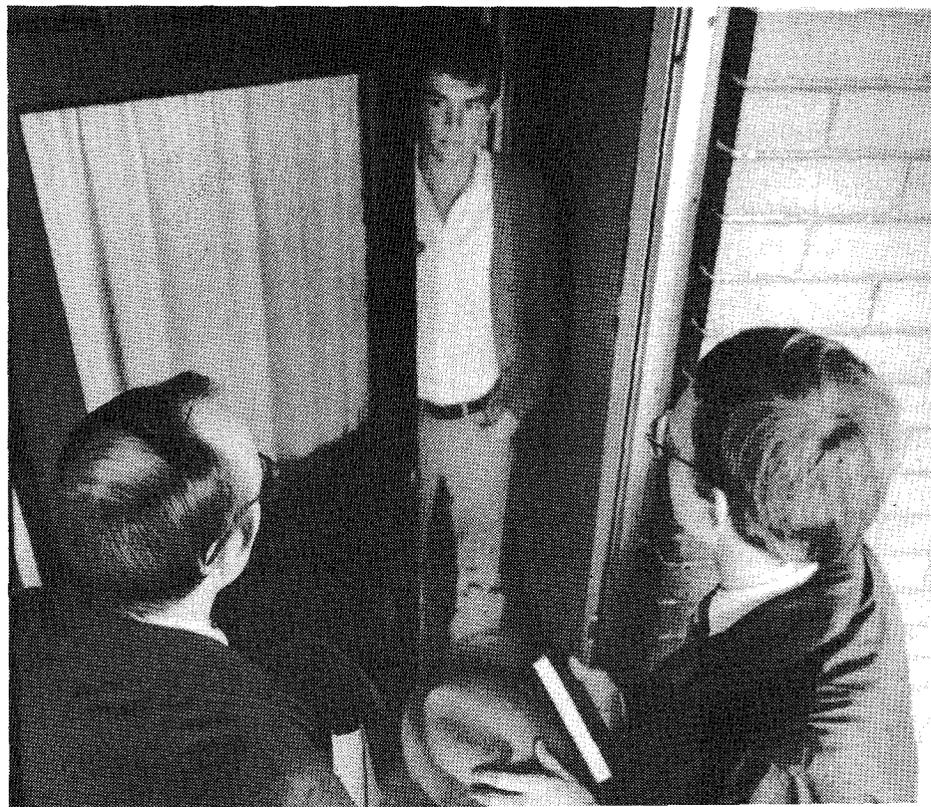
ねました。「父さん、モルモン経を持ってたら貸して欲しいんだけど。」

父はいきなりその顔を上げると、「ああ、いいとも、夕食が済んでからでいいかな」と驚きを隠し切れない表情で言いました。

父は整理たんすの一番下の引き出しから、あの見覚えのある黒表紙の本を出し、私によこしました。その時父は何も言いませんでしたが、私を見つめるそのまなざしには何か熱いものがありました。

私は食事の時間も寝る間も惜しんで、3日で読み終わりました。全篇が神のみ言葉であり、その光の前に、心の中の暗い影がす

▼地味なオーバーと帽子に身を包んだふたりの男の人がそこに立っていました。





べて取り去られていくような思いがしました。その本は神の書でした。私は読みながら、父の整理たんすから引っ張り出し、赤い線のところを読んだ少年の頃の自分に帰っていました。なつかしい自分の家に戻って行くような気がしました。

私が読み終えた後は、兄が貪るように読み、その次は私のフィアンセへと回されていきました。しばらくして私たちは皆バプテスマを受けました。そして私は兄と共に地方部宣教師として妹に福音を宣べ伝えたのです。私たちが証をする度に、妹の目から涙があふれ、じゅうたんをぬらしました。私たちの言葉を通して妹の心が揺り動かされたのでした。今私たちは皆活発な会員として生活し、神殿結婚の祝福を受けています。

しかし、まだ解けない疑問がひとつありました。

▲父は整理たんすの一番下の引き出しから、あの見覚えのある黒表紙の本を出し、私によこしました。その時父は何も言いませんでした。

私はバプテスマを受けてから何年か経った時、父を訪ねて聞きました。「父さん、父さんはどうしてぼくたちに福音のことをひと言も話さなかったの。」

父は深々とため息をつくとき、窓の外に目をやり、こう言いました。「私が福音のことも教会のことも何ひとつ言わなかったのは、自分がそれをするにふさわしい人間だと思えなかったからだ。しかし、いつの日かお前たちが正しい権能を持った人の口からそれを聞き、バプテスマを受けるようにといつも祈っていた。確かに私は罪人だったが、そのことだけはいつも心に願っていた。

実際おじいちゃんの代には皆熱心に教会

に集っていた。おじいちゃんとおばあちゃんは今世紀の初め頃に教会に改宗した人で、私たち子供を福音の中で育て上げてくれた。おばあちゃんは扶助協会の会長を務めたこともある人だ。ところが1926年に家族あげてカリフォルニアへ移住することになった時、私はお前の母さんと結婚するためにイギリスに残ったんだ。母さんの両親は教会のことは猛烈な反対で、当時の時代的な難しさもあって、私は間もなく教会から足を遠ざけるようになり、最後にはまったく行かなくなってしまった。教会を疑ったことは一度もなかったが、教えからは遠くかけ離れた行ないをするようになってしまっ

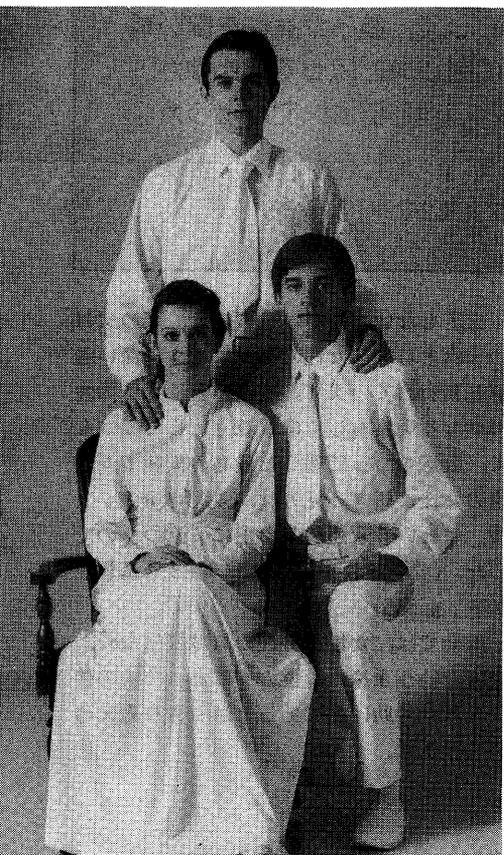
たんだ。お前たち子供にはいつも申し訳ないという気持ちで一杯だった。ただ、一度教会から離れてしまうと、再び戻るということは並大抵のことではできなくなってしまふ。お前たちが教会員になってくれてこんなうれしいことはない。長老たちもさぞかし驚いたことだろう。まさか尋ねた当の本人よりも、その子供たちの方が福音を知りたがっていたとはね。」

私は追憶から覚め、支部長会で問題になっているその事柄について考えました。なすべきことはわかっていました。

私は言いました。「確かに記録上問題と思える会員が当支部にはたくさんいます。教会に活発になる見込みもほとんどないかも知れません。しかし彼らも教会員です。彼らを水にたとえるなら、彼らの中には宣教師が漁ることのできる魚もいると思います。心をかたくなにしている教会員もいるかも知れません。教会に愛想をつかしたり、背を向けている人もいるかも知れません。しかし、とにかく網をうってみましょう。何べんやっても良い結果が出ないかも知れません。でも主が言われたことを思い出して下さい。『舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば、何かとれるだろう。』（ヨハネ21：6）この言葉を忘れないで下さい。」

そして、その問題に関する3人の気持ち^が完全に一致したことを示す挙手があり、私たちは次の議事に進んだのです。

◀今私たちは皆活発な会員として生活し、神殿結婚の祝福を受けています。



心



ジャネット・トーマス

交通事故でひどいやけどを負いながらも、
逆境を乗り越えてきたひとりの青年の物語



ピーター・ジェブスはガソリンを満タンにすると、自動車の給油口のキャップを閉めました。土曜の夜、彼はデートの帰りにスタンドに立ち寄ったところでした。一番仲の良い友達から伝道の召しが来たというニュースを聞き、ずっとそのことを考えていましたが、ピーター自身も、2、3週の内に申請書を出すつもりでいました。

アイダホのボイシへの幹線道路に通じる交差点に差しかけた時です。ピーターの車は別の車と正面から衝突しました。衝撃でフロントガラスはこなごなに砕け、路上に飛び散りました。そして、リヤエンジン式で車体の前部に据え付けてあった燃料タンクが爆発したのです。

「割れた窓越しにガソリンが座席の中に入ってきて、目にもかかりました。車の中はそれこそガソリンだらけです。そしてすぐに火がつき、車は火だるまになりました。通りかかった何人かの人が急いで車を止め、3人の人が車に近づき私の車のドアを開けました。しかし火の勢いが激しくて、私の姿を認めることができませんでした。それでも彼らは着ている物で火を鎮めながら、ようやく私の手を見つけたのです。3人は私の手をつかみ、車の中から引き出しました。そして火を消すために私の体をごろごろ転がしたのです。」

その晩ピーターは兄から借りたウールの厚手のセーターを着ていましたが、セーターで覆われた胴体と腕の部分はやけどが比

較的に軽く、それで命を取り留めることができました。

1965年、ピーターは生地のアイダホ州ボイシで、友人の多くがそうであるように、伝道への準備をしていました。しかし、あの事故の日を境にすべてが変わってしまいました。彼が受けた試しは並のものではありませんでした。しかし、彼は人生を一変させた苦境と闘い、勝利を治めたのです。

「病院に運ばれると、ひとりの若い医師が必要な処置をすべて施してくれました。火ぶくれがひどく、普段の2倍はあるかという体になり、自分でもうつ伏せになっているのか、あおむけになっているのかさっぱりわからないほどでした。医師は生の兆候が何かないと懸命でしたが、結局何も見つからず、すでに死亡していると宣告したのです。彼は私の上にシーツを掛けると、ベッドに乗せたまま、救急看護室の入口の方へ戻しました。ベッドの上に横たわっていると、ひとりの看護婦が側を通りました。その時です。彼女はシーツの下の私の腕がかすかに動くのを見てびっくり仰天しました。医師たちは再びありとあらゆる手を尽くして、私の治療に当たったのです。」

7週間、ひどい痛みが続きました。回復の見込みはまったくありませんでした。医師や看護婦が交替で治療に当たりましたが、ピーターの意識は段々と薄れていきました。

「医師や看護婦の話し声が聞こえてくるんですが、痛みのために、まるでどこか別



世界から聞こえてくるような感じでした。頭の中にもやがかかっているようです。医師が母親に『残念ですが、息子さんの快復の見込みはありません』と言っているのが聞こえました。その時は、起き上がって彼を殴りつけてやりたい気持ちでしたよ。実際そうしようとしたんですが、縛りつけられたようにびくともしません。『今まで生きてこれたのが不思議なくらいなのです。ここまできてはあきらめるしかありません』という医師の言葉を聞いた時のあの気持ちはとても忘れられません。

昏睡状態になっていく時、自分はこのままで死んでいくのだろうかと考えたのを覚えています。そういう状態は何度もありましたが、覚えているのはその時のことだけで、後は覚えていません。意識が薄れていく中、私は『見てろよ、まだ死んじやないんだ、そう簡単に死んでたまるか』と、はらわたが煮えくり返る思いでした。

しかし痛みが激しく、自分でももうだめかと思いましたが、それならせめて生の証として死ぬ前に数を10まで数えてやると心に決めました。5か6あたりまで数え、後はもうろうとしながら、『10まで……10まで数えるんだ……』と自分に言ったところまでは覚えています。』

苦しい闘いながらも、ピーターは徐々に快復の兆しを見せ始めました。腕、足、頭に止血用の包帯を巻いたピーターに医師は彼の体がどうなっているかを話してくれま



割れた窓越しに
ガソリンが座席の中に入ってきて、
目にもかかりました。
車の中は
それこそガソリンだらけです。
そしてすぐに火がつき、
車は火だるまになりました。



した。腕と足の脱臼、それにあばら骨3本、指7、8本、あご骨の骨折、頭部の強打、皮膚の50パーセントが壊死（体の一部が死んだ状態）、40パーセントが第1度から第2度火傷。しかし、ピーターはもうひとつ、ガソリンをまともにかぶった目は果たして見えるようになるのかという、大切なことを聞かなければなりませんでした。



「医師が病室を出て行くのがわかりましたが、一番知りたいと思っていたことをまだ聞いていませんでした。それで私は腕を振って彼の注意を引こうとしました。彼は私のところに来て『ピーター、どうしたんだ』と聞きました。私は『目、目、目』と言うのが精一杯でした。彼は私の腕を握りましたが、無言でした。彼には私が何を言おうとしているかわかっていたのですが、答えませんでした。それが答えだったので。彼の嗚咽^{うげん}がかすかに聞こえました。私が最も恐れていたことでした。」

遅々とした快復への日々は何カ月も続きました。実際ピーターは1年間入院生活を送り、一度退院してからも、何十回という手術の繰り返しで、病院を出たり入ったりしました。最初の手術は目の手術でした。手術が済んで快復室にいた時、結果は明朝、包帯が取られた時にわかると知らされました。

その夜遅く、ひとり目を覚ましたピーターは翌日のことをあれこれと考えました。

「失明するのではないだろうかと考えるとき、とてもたまらない気持ちでした。そして、もしもう一度見えるようになったらという思いと、だめだったらという思いが交錯し、胸がふさがるようにでした。」

ピーターは包帯を巻いた手で、目に当てた布をぎこちなく外し始めました。そしてベッドの側にあった金属性の皿を胸の上に移しました。それを使って、ベッドランプ

の光を目に反射させようとしたのです。ランプのスイッチを入れると、目の前がぱっと明るくなりました。見えたのです。うす暗い部屋の光に慣れてきた時、ピーターはもう一度その皿を持ち上げ、キラキラと光を反射させました。

「自分の顔を見た時、私は自分の目を疑いました。快復の見込みは千にひとつもないと言われていた私の家族は、余計なことは何ひとつ話してくれていなかったのです。片方の耳、両目のまぶた、鼻、くちびるがないのです。これが自分の顔だとはとても信じられませんでした。見えるようになるかどうかだけに心を奪われていた私は、何を見るかまでは考えてもみませんでした。私はまったく度を失い、悲鳴ともつかぬ大きな叫び声を上げていました。」

新たな苦しみに直面したピーターは、その夜彼に深く同情するひとりの看護婦に次から次へといろいろなことを尋ねました。これからどうなるのか、どういうことになっているのか、退院した後はどうなるのか、買い物のような場合はどうしたらよいのか、ダンスに行く時は、それから好きな女性ができたらどうしたらいいのか。そこまで聞いてピーターは出し抜けて笑い出しました。看護婦は何がそんなにおかしいのかと尋ねました。

「不意に昔のことを思い出したのです。その時もやはり鏡をのぞき込んで、自分の顔がどんな風に見えるかあれこれ心配して



いたのです。

16歳の時でした。ある時ダンスパーティーがあり、私は生まれて初めてタキシードを着せてもらうことになりました。胸がわくわくしました。16になったばかりの頃です。ひとりの女の子を特に誘いました。そして食事と一緒にすることにしたのです。もちろん初めてのことで、そわそわと気が落ち着きませんでした。今でも覚えています。遅れないようにと昼の2時頃からタキシードを着込んだのです。ちょうネクタイをつけようとしていた時です。あごのところは何か変なのです。不吉な予感がして、鏡のところへ飛んで行きました。あごの左の方に何か傷らしきものが見えました。よりによってどうしてこんな日にと、怒鳴りたい気持ちでした。写真も撮ることになっていたのです。何とかならないかとそこをいじくりまわしている内に、血まで出て来てしまいました。

約束の時間が来て彼女と会った時、左あごの傷は見えないように、顔の右側だけを向けるようにしました。ダンスの間中、彼女からは一体だれを見ているのかと聞かれることしきりでした。私としても泣くに泣けないところだったのです。ダンスパーティーは何とか切り抜け、今度はレストランへ行く段になりました。私は店の人に頼んで10人がけの大きなテーブルに座らせてもらいました。そうすれば彼女の左側に座って、傷に気づかれないで済むからです。



片方の耳、
両目のまぶた、
鼻、
くちびるがないのです。



病室で看護婦と話しながら、その時のことを思い出したのです。勝てる見込みのない闘いでした、確かに全然見込みがなかったのです。それでもなお私は自分の命と、持てるすべてををかけて闘っていました。まだ私の目には光が残されていました。私は少しの間天父に祈りを捧げ、目が見えるようになったことを感謝しました。最初は見える



見込みすらも全然なかったのです。それにしても、16の時の自分のあのつまらない行ないは決して忘れることがないでしょう。」

入院中、ピーターは自分は何をしたらいのだろうと随分考えました。退院まではまだ長い苦しみとの闘いの日がありました。幾人かの親しい友達が、目標を持つことと心の持ちようについて教えてくれたのはこの時期でした。同じワード部のローレンス・オバーン兄弟はそのひとりでした。彼はよく顔を見せ、何か目標を持つようにと励ましを与え続けました。最初ピーターはオバーン兄弟の言葉に取り合おうとしませんでした。オバーン兄弟も、「大切なのは内面だ、外見じゃないんだ」と一歩も譲りませんでした。

「『わかりました。そこまで言うんだったら、あなたも一度火で焼かれてみて下さいよ。そうしたら、あなたのおっしゃることもよくわかりますよ』と取りのぼせて、ひどいことを言ってしまいました。耳にかかった包帯越しに、オバーン兄弟の泣き声が聞こえました。私は、自分にこれほどまでにしてくれるオバーン兄弟に何とひどいことを言ってしまったのだろうと、すぐに後悔の念に駆られました。彼が『ピーター、私もそうできるものなら、そうしたい』と言った時、この人が我が子のように私を愛してくれているのがわかりました。それ以来、私は彼の言うことなら何でもしようと決心しました。」

ふたりは目標を何にするか話し合いました。最初に決めたのは、手術の度に何針縫うかを数えるという目標でした。これは間もなく2千針というところで、医師や看護婦にやめてくれと言われるまで続けました。

次は何べん注射をされるかを数えました。これは1252回まで続けられました。3番目は病院内で最も模範的な患者になることでした。時には人間が嫌になることもありましたが、とにかく目標に向けて頑張りました。そして退院する時には病院の職員たちから「最も模範的な患者」と彫った飾り板をもらったのです。

もうひとり、同じワード部の会員で、学校の帰りに立ち寄っては本を読んでくれた姉妹がいました。事故の前にはそんなに親しいというほどでもなかったのに、喜んでピーターのために時間を取ってくれたのです。ピーターはもし立場が逆だったとしたら、自分はとても彼女のようにはできなかっただろうと考え、恥じ入ることがしばしばありました。

「彼女がやけどを負って入院したとしたら、というあってはならないことがときどき頭に思い浮かび、自分は彼女を見舞ってやるだろうか考えました。自分は決して悪い人間だとは思っていませんでした。でも仕事だと言って、自動車や服を買う金を稼ぐことに汲々としていたのではないかと思います。とても彼女のようにはなれなかっただろうと考えた時、私は心の中で見え



ない涙を流しました。彼女は親身になって私を助けてくれていたのです。私の思いを言葉にして彼女に伝えることはできませんでしたが、その代わりにひとつの大切な決心をしました。病院で一番模範的な患者になるだけでなく、彼女への恩返しをしようと心に決めました。退院し、歩いたり、見たり、並のことができるようになったら、ほかの人を助けることで、彼女から受けた分を返していこうと思ったのです。

私は退院すると、問題を持っている人を見つけ、助けをするように努めました。そうしている内に、私は自分の問題にとらわれることがなくなり、くよくよしたり、自分を憐れんだりすることがなくなりました。最も大切なのは内面であるという素晴らしいことに気がつき始めたのです。美しさは内面から出てくるものです。」

ピーターはその病院を出てから、ソルトレーク・シティへ整形外科手術を受けに行く準備をしました。義理の兄弟たちと一緒に住んで、普通の人間になるのだという大きな目標に向けて歩みを始めようと考えていたのです。

ピーターはもう病院を精神的な苦しみを癒す場と考えるのはやめにしました。確かに病院の中の人たちは、彼の身に起こったことを理解し、彼を患者として受け入れてくれました。しかし、今やピーターは外見に重きを置く外界へと足を踏み出したのです。その第1歩は、事故以来初めて食料品

店へ買い物に行った時に始まりました。病院外の空気が新鮮に感じられ、体中に力がよみがえってくるようでした。そして店に入り、品物を幾つか選んだのです。時計は5時を指していて、レジは混み合っていました。

「私はひとりの婦人の後ろに並びました。彼女にはふたりの子供がいて、店内を走り回っていましたが、母親の勘定の番が回ってきたのに気がついて、レジの所へやって来ました。年下の4歳ぐらいの子がふと顔を上げて私を見ました。彼は何の心構えもできていなかったのでしょうか。『おばけ一つ！おばけだよ一つ！』と大声を上げながら、通路の向こうへ逃げて行きました。母親も一体どうしたのかと振り返り、そこに立っている私を見て悲鳴を上げました。そして手に持っていた買物かごを落とすと、一目散に子供の後を追いかけていきました。店内の他の人々も気がつき、彼女の大声に何事が起きたのかとあたりを見回しました。人の動きがびたりとやんで、すべての視線が私に向けられました。それから悲鳴とも驚きともつかぬ声があちこちに上がり、ひそひそと話す声が聞こえてきました。その時、私は胸にナイフを突き立てられたような気持ちでした。」

この頃ピーターは顔を初め様々な部位の傷を治すために、28回にわたる一連の手術を受けていましたが、監督の訪問を受け、何かしたいことがないかと聞かれました。



この頃ピーターは
顔を初め様々な部位の
傷を治すために、
28回にわたる一連の手術を
受けていましたが、
監督の訪問を受け、
何かしたいことがないかと
聞かれました。
「思わず『伝道に出られたら
最高でしょうね』と
答えてしまったのです。」



「思わず『伝道に出られたら最高でしょうね』と答えてしまったのです。それは私の大きな望みでした。しかし、どう考えても無理な話でした。ところが監督は一も二もなく、『それじゃ、その準備を今から始めよう』と言うのです。私は『無理ですよ、監督』と言い、自分の収入、多額の借金、完全に治っていない足のこと、将来に控え

ている多くの手術、人々の見る目などについて話しました。それでも監督は『とにかく、準備を始めよう』と言うだけでした。」

監督はピーターを日曜学校の教師に召しました。そして何度かレッスンをしていく内に、福音の教義クラスの中で幾つか良い経験をしていったのです。ピーターは病院への支払いのために、幾つか仕事をしていました。また手術も何回か予定されていて、将来を悲観的に見るようになりかけていました。そんな時、何人か友達に来て、ステーキ部のダンスパーティーに行こうと誘ったのです。行きたい気持ちはありましたが、ピーターは断りました。しかし彼らは6時間の説得の末、一緒に行くと約束させることに成功しました。

「会場入口に来ると、皆私に目を向け始めました。コート掛けの向こうからのぞくようにしている女の子たちもいました。女の子がふたり、まさか聞こえているとは思わなかったのでしょうか、『見てよ、あの、私ダンス申し込まれたらどうしよう』などとひそひそ話をしていました。私はまたしても気がふさいできました。」

私はバンドの近くにいた男性たちの陰に隠れているようにして、何があってもそこから一歩も動くまいと心に決めました。」

休憩時間に友達がダンスの輪に加わるように進め、ピーターを皆のいる所へ連れて行きました。ピーターもバンドが演奏を再開したら、だれかにダンスを申し込もうと



覚悟を決めました。

「音楽が始まると私は自分の決意をもう一度固め、顔のことは忘れてとにかくダンスをしようと思いました。その時そうしなかったら、残りの時間すべて意気地のない有様で終わってしまうのは目に見えていました。」

ピーターは女性たちが集まっている所に行き、その中のひとりにダンスを申し込みました。ところが彼女はその声に振り向くと悲鳴を上げ、人ごみをかき分けるようにして、ホールの外へ出て行ってしまったのです。そうなるのは初めから決まっていたようにも思えました。バンドの演奏も、ダンスのステップも一瞬すべてが止まり、皆の注意が声のした方に向けられました。ピーターが元の場所へ戻ると、友人たちが来て彼をなだめようとしてました。そして再びダンスが始められました。

「大声で叫び、そこを飛び出したい気持ちでしたが、『ピーター、ここで逃げてはならない。残りの人生を逃げて通すことになってしまう』という小さな声が、心の奥深くにささやきかけてきました。そうしてもうひとつ不思議なことが起こりました。足が自分のものでないかのように動き、気がつくくと別の女性のところへ行って、ダンスをしてくれるように申し込んでいるのです。自分自身の力を超える何かがありました。しかし、自分の心の中ではこう言っていました。『何をしてるんだ。元の所へ戻れ。こ



以来この安らぎは
いつも変わることなく、
どのような仕打ちを受けても、
動揺することが
なくなりました。



んな目にあわされてそれでも平気なのか。』せめ合うふたつの声に、私の心は揺れ動きましたが、小さな声は私を励まし続けました。『ピーター、断わられてもいい。また別の人に申し込みなさい。逃げてはいけません。そうしたら一生逃げまわることになる』と。」

ピーターはその声に従って、音楽が始ま



る度に女性たちに申し込みをしていきました。しかし、ほとんど冷たい断われ方をただけでした。その夜、主に祈るためにぬかずいたピーターの心の中は苦々しい思いで満ちていました。

「人々からの圧迫、冷やかな態度、白い目、後ろ指、いつ受けられるのかわからない手術など、すべてが一度に押し寄せて来るように思えました。手術を受けたとしても、目やまぶた、口、鼻が元のようになるのかどうか何もわかりませんでした。このようにすっかり滅入り、人々への怒りすら抱いていた私は、天父に祈りました。『耐えられない試しは決して与えられないと聖典に約束されています。今私が願うのもそのことです。』私はベッドに入りました。次の日の朝、私の心は穏やかで落ち着いていました。以来この安らぎはいつも変わることなく、どのような仕打ちを受けても、動揺することがなくなりました。天父は約束通り、心の平安を下さったのです。私たちが戒めを守るなら、天父は必要なものを与えて下さいます。天父からいただいた平安で、私は心に憂いを持つことがなくなりました。人々の私への態度は変わりませんでした。しかし私が変わったのです。」

霊的な基の上に建てられた自信によって、ピーターは伝道へ向けて少しずつ備えをしました。書類を送付し、トーマス・S・モンソン長老の特別面接を受けた後で、ピーターは北カリフォルニア伝道部へ召されま

した。

ピーターはそれまで、まぶたのない目を隠すために、いつもサングラスをかけていました。ひどく人目を気にして、サングラスなしにはどこにも行きませんでした。しかし伝道の召しの面接に行く時にはずしてからは、2度と使わないようにしました。まぶたは後の手術で元のような姿に戻りました。

彼の自分自身に対する新たな見方は、伝道を実りあるものとし、人々に良い影響を与え、教会に導く力となりました。

伝道を終えたピーターはすぐに仕事にかけかり、引き続き手術を受けるため病院に通い始めました。それから彼はステーキ部宣教師に召されましたが、その関係でステーキ部伝道部長の秘書を務めていたマージョリー・クレッグ姉妹と知り合いになりました。ふたりは良い友人となり、ピーターは彼女と自分の友達のデートの約束を中に取り持つようになりました。何度もそういうことがありましたが、ある日マージョリー姉妹が、もうデートの約束の手配はしてくれなくても結構と言ってきたのです。ピーターは今度は自分と交際してくれるように頼みました。友情を基にした関係はやがて愛に変わり、やがてふたりは結婚しました。

「妻は最初に会った時以外は、私のやけどを気にする様子はありませんでした。人人が私を特別な目で見ることは百も承知です。でも妻は私の外見よりも心を見ていた



のです。彼女といると自分がとてもハンサムになったような気分になります。私が彼女を愛したのは、ただの恋心だけからではありません。最高の友人だったからです。彼女こそ私が祈り求めていた人でした。私は外面ではなく、内面を見てくれる人を捜していたのです。外面的なものだけでは、うまくやっていけませんからね。」

すべての希望を打ち砕いてもおかしくなかったあの事故以来、ピーター・ジェブソンは艱難と闘い、実業家として成功し、教会の指導者、夫、父親としても立派に生活しています。彼は今、保険と投資信託業を営み、教会では若い男性の中央役員を務め、一男二女を育てています。

ピーターは19歳の時病院のベッドの上で自分の将来の姿を考えていた時、こう自問しました。「問題はいろいろあるが、これだけを成し遂げておけば、あとはひとりでの解決していくというものがあるとすれば、それはどんなことだろうか。」目に包帯をしていた頃に友人から読んでもらった本が何冊か、彼の目標の設定に影響を及ぼしました。

生命保険業の経営に成功するためには(1)個人的に良い対人関係を築くことができ、(2)教育を受け、(3)地域の人々の信頼を得、力量を示さなくてはならない。

ピーターはこの目標をもって保険会社に職を求めました。しかし59社に当たって見たものの、どこからもいらい返事はもら



すべての希望を
打ち砕いてもおかしくなかった
あの事故以来、
ピーター・ジェブソンは
艱難と闘い、
実業家として成功し、
教会の指導者、夫、父親としても
立派に生活しています。



えませんでした。最後によりやく得たのがある保険会社の企画の仕事でした。ようやく最初の第1歩にこぎつけたのです。根気よく、そして働きながら学校に通い、ピーターは仕事を覚えていきました。

結婚するまでには、病院への支払いをすべて済ませましたが、新婚生活は家具ひとつない状態からの出発でした。あるのは自



信とやる気だけでした。10年の内にピーターは強い意志と修練により、ゼロの状態から今日の生活を築き上げたのです。

さて、ピーターとその家族は皆日記をつけ、自分の目標に向けてどう進歩しているかを記録しています。まだ字が書けない子供たちのためには、マージョリーが代わって書いてあげます。

筋骨型の体格のピーターは、今年目標のひとつに、3キロメートルを16分で走るという目標を立てましたが、すでにこの記録を達成しています。

オフィスの椅子に座り、自分の力で建てたビルの窓から外を見やる彼の表情には自信が感じられます。しかし、その自信も一朝一夕の内に身につけたものではありません。自分自身の弱さとの格闘が何度もあったのです。彼はこう言っています。「私は事故のことを考えるたびに、自分ほど不幸な人間はいないと考えました。私たちは気をつけないと、何でも悪く悪く解釈してしまうようになります。そうすると、決して失望の淵からはい上がれなくなります。」

さらにこう続けました。「あまり深刻に考え過ぎると、本当にやっかいなことになりますよ。何でも難しく考えないと気が済まない人が多過ぎます。外的な要因に対して決まりきった反応しかとれないように自分自身を縛りつけているんです。太っていようがやせていようが、歯並びが悪かろうが、そんなことは問題ではありません。問題は

だれにでもあります。一見何の問題もなさそうな美人でも、何かしら内面的な問題を持っているものです。問題を持ってない人はいないのです。大切なのは、どういう問題を持っているかではなく、問題にどう取り組むかです。」

ピーターも決してあの事故があつてよかったと言ってるわけではありません。しかし彼はそこから教訓を得ました。こう言っています。「困難な問題が起こったらそれに感謝することです。そこから学ぶこともできるのです。私たちは自分の救いを達成するために地球に来ました。美しさは主に近く生活しながら、自分の救いの達成に努める時に得られるものです。」

彼は会う人の心をたちまち温かくする、本当に魅力的な人物です。彼が自分の内面に築き上げたものは、体に負ったどんな傷よりもはっきりと見て取れます。昔、ふさぎきった気持ちを取り除いて下さいと祈ったあの晩に、彼の一生は変わったのです。彼は逆境にどう対処するかを学び、心の安らぎを与えられました。

ほかの人に何かアドバイスをと求められて、ピーターはこう言いました。「何かをつかみたいと思ったら、律法と戒めを学び、実践することです。成功するかどうかは外的要因で左右されるものではありません。律法を学び行なって下さい。」

キンボール大管長，

いや 癒しの儀式について語る

大管長 スペンサー・W・キンボール

「われらは、異言を語る力、予言する力、啓示、示現を受くる力、病を医す力……の賜あることを信ず。」（信仰箇条第7条）救い主は御自分が昇天された後の世を教え導く使徒たちをお遣わしになる時に、次のような指示をお与えになりました。

「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。

信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。

信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、

……毒を飲んででも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる。」（マルコ16：15—18）

主は、神権と信仰のあるところには、人を驚嘆させるためではなく祝福するために能力の顕われがあるという永遠の原則をはっきりと教えられました。初期の弟子たちはこの永遠の原則を理解していました。ヤコブはこのように語っています。

「あなたがたの中に、病んでいる者があるか。その人は、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリブ油を注いで祈っ

てもらおうがよい。

信仰による祈りは、病んでいる人を救い、そして、主はその人を立ちあがらせて下さる。……義人の祈は、大いに力があり、効果のあるものである。」（ヤコブ5：14—16）

獄中のバプテスマのヨハネが使いを送り、「きたるべきかた』はあなたなのですか。それとも、ほかにだれかを待つべきでしょうか」（マタイ11：3）と尋ねさせた時、主は次のように返事をなさいました。「行って、あなたがたが見聞きしていることをヨハネに報告しなさい。盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞こえ、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている。」（マタイ11：4—5）

主は御自分で行こうとしておられたすべての町や村へ七十人を遣わされる際に、権能を与えて言われました。「その町にいる病人をいやしてやり、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。」（ルカ10：9）

七十人たちは喜び勇んで帰って来て、「主よ、あなたの名によっていたしますと、悪霊までがわたしたちに服従します」と言いました。すると、救い主は次のようにおっしゃいました。「わたしはサタンが電光のよ



うに天から落ちるのを見た。

わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう。

しかし、霊があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にされるされていることを喜びなさい。」(ルカ 10:18—20) そして彼らは「多くの悪霊を追い出し、大ぜいの病人に油をぬっていやした」(マルコ 6:13) のでした。

初期の頃から、儀式や祝福の時には油を使用していました。ヤコブは霊の顕われを受けた時に、まくらのかわりに使っていた石を立てて油を注ぎました。また、王の聖別にも油が使用されていました。サウルは主からイスラエルの民を治める王に召された時、ベニヤミン族の王として予言者サムエルから油を注がれました。

また、有名な詩篇第23篇にも、油が使用されていたことがうかがえます。「あなたは……わたしのこうべに油をそそがれる。わたしの杯はあふれます。」(5節)

癒しの時に油を使用することはいろいろな箇所にも述べられていますが、常に油を用いていたのかどうかはわかりません。また、皆が皆油を使ったかどうかはわかりませんが、そのような習慣は広く行なわれていました。祝福をする際には油を用いることも、用いないこともありました。

本来の意味の癒しの儀式は灌油と結び固めのふたつの部分から成っています。まずひとりの長老が祝福を受ける人の頭に少量の油を注ぎます。事情が許せば頭のとつべんに注ぎます。決して体の他の部分に注い

ではいけません。主のみ名と神権の権能によってその人の健康が快復するよう油を注ぐのです。結び固めは、ふたりまたはそれ以上の長老たちが行ないます。その中のひとりが結び固めを宣言し、適切な祝福の言葉を述べます。やはりこれもイエス・キリストのみ名と神権の権能によって執り行ないます。

時には、その場に油がなかったり、兄弟がひとりしかない場合があります。また、その病人が最近灌油の儀式を受けたばかりのような場合があります。その時には、ひとりまたはそれ以上の長老が同じく主のみ名とメルケゼデク神権の権能により祝福します。祝福を宣べる人は適切と思われることをみたまの導くままに宣言します。

次に祈りがあげられますが、これは灌油の儀式とは様相を異にします。祈りは癒していただけるようにとの主への願いであり、希望があればだれでも捧げることができます。したがって、儀式とは言えません。祈りは主の働きかけを願い求めるわけですが、祝福や灌油の儀式はイエス・キリストのみ名により兄弟たちが授けます。

時折この聖なる儀式が乱用されているようです。知り合いのある女性は、骨折のために数週間入院していた時、長老たちを呼んで毎日癒しの儀式を施してもらっていました。あまりしばしば儀式を受けるのは信仰が欠けているか、または信仰を強める責任を長老たちに押しつけようとする誤った考えのあらわれです。これは大方の認めるどころです。

かなり前のことですが、品位ある婦人ルーシー・グラント・キャンノン姉妹から私は

貴重な教訓を得ました。彼女はアリゾナに住む自分の娘の家を訪問した時にひどい病気にかかりました。ただちに私たち長老が呼び出されて彼女に癒しの儀式を施しました。その翌日、キャンノン姉妹にもう一度癒しの儀式を行ないましょうかと尋ねたところ、彼女はきっぱりとこう言いました。「いいえ、私はすでに灌油の儀式を施していただきました。もう儀式を受けたのですから、信仰によって祝福を願い求めるのは私の責任です。」

ときどき、癒しの儀式を受けてしばらくした後にさらに祝福が必要であるように病人が感じる時があります。その時には油を用いず祝福をするだけにします。

信仰の必要性がしばしば軽視されています。病人やその家族は、祝福を受ける本人の方に、より大きな責任のあることに気づかず、ただ神権の力と儀式を施してくれる兄弟たちの賜だけをあてにしているようです。教義と聖約の46章にあるような癒しの賜をもっていると思われる人々がいます。病人が、信仰篤く能力もあり自分の信頼できる人を選んで祝福を受けたがるのも無理はありませんが、その人が正常な認識と責任の持てる人であれば、癒されるか否かは他の何よりも本人の信仰にかかっているのです。「あなたの信仰があなたを救ったのです」(マタイ9:22)と、主は繰り返しおっしゃいました。主は贖い主であり、「天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」(マタイ28:18)御方であるにもかかわらず、なお「あなたの信仰があなたを救ったのです」と繰り返し語られました。皆さんの信仰どうりに、その身になるので

す。(マタイ9:29参照)

カペナウムでは百卒長が主のもとに来て、自分の僕が家でひどく苦しんでいるので癒してやって下さいと訴えました。

「わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません。ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります。」(マタイ8:8)

そして百卒長はキリストの霊的な力を自分の軍事上の力にたとえて言いました。主はこれに非常に感心され、「イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない。……行け、あなたの信じたとおりになるように」とおっしゃいました。「すると、ちょうどその時に、僕はいやされ」(マタイ8:10-13)ました。

12年間もの間、難儀な思いに耐えてきた女性がいました。彼女はすがるような気持ちで「み衣にさわりさえすれば、なおしていただけるだろう」と考え、主の衣のすそにさわると、その時に癒されました。「娘よ、しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです」(マタイ9:21-22)。

またゲネサレの地でも主の上着のふさにさわった病人は皆癒されました。(マタイ14:35-36参照)

盲人のバルテマイの目が見えるようになったのも、彼が絶えず一心に主に近づこうとしたからでした。また、主はエリコの男の目をお癒しになり、こうおっしゃいました。「あなたの信仰があなたを救った。」(マルコ10:46-52参照) 目が見えるようになったこの男は主の熱心な従者となりました。「あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように。」(マタイ9:29) また主

はふたりの盲人の目に手を触れてお癒しになりながらこう言われました。「わたしにそれができると信じるか。」(マタイ 9 : 28)そしてふたりの盲人は見えるようになりました。

人には好みがあるので、時として一部の教会指導者のところにばかり祝福を受けようと人々が詰めかけるのを見受けることがあります。病気の時や弱くなった時、また恐れのある時など、正しい生活を送っていて信仰も篤く、献身的な長老たちを信頼して、彼らに祝福を頼みたくなるのは自然なことです。しかし教会幹部やステーキ部、ワード部、伝道部の役員だけが神権の癒しの能力ちからをもっているわけではありません。ホームティーチャーを含めて、教会の大勢の兄弟たちが祝福を施す権能を持っています。彼らの施す儀式や祝福がこれを受ける人の篤い信仰と結びついて驚くべき癒しの力を発揮し得ることは、若くて未熟な宣教師たちが行なった数多くの素晴らしい例を見ても明らかです。

迷っている人々や懐疑論者からよく次のような質問が提起されます。一体なぜ今の時代には予言者や救い主の時代にあったようなみたまの顕われ(癒しも含めて)が起きないのだろうか。

それに対する答えは明白です。どの時代にも見られない程数多くの奇跡的な癒しが今日行なわれています。救い主の伝道活動とその後しばらくの出来事が短い幾つかの章にまとめられています。ヨハネはこう言いました。「イエスのなさったことは、このほかにまだ数多くある。もしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書

を収めきれないであろうと思う。」(ヨハネ 21 : 25)

歴史的な出来事を要約して記したために、聖書には癒しの中でも特筆に値するものだけが記録され、その結果あたかもすべての奇跡がはなばなしく行なわれ、癒されることを願ったすべての人々が癒されたかのような印象を与えます。それほど目立たない数々の祝福、たとえば頭痛が止まったことや、快復が速まったこと、苦痛が和らげら

神権者の施す儀式や祝福は、
これを受ける人の
篤い信仰と結びついて
驚くべき癒しの力を
発揮し得るのです。

れたことなど、キリストや使徒の時代に行なわれた多くのおびただしい出来事はおそらく記録されないままになったに違いありません。現代においてもこの時代に起きた奇跡をひとつ残らず書き残しておいたならば、いくら図書館があっても納めきれないことでしょう。

1955年にヨーロッパの伝道部を訪問した時、私は何百人という宣教師たちの証を聞きました。大勢の宣教師たちが同じような奇跡の話を繰り返し語り、行なわれた業に驚嘆していました。例えば、重い病気にかかり医者から大手術を言い渡された話を大勢の宣教師がしました。癒しの儀式を施し、祈り、断食を行なって、いよいよ手術の時になると、その同じ医師がレントゲン写真

を携えてやって来て「いやあ、何が起こったのか、手術は必要なくなりました」と言うのです。こうした出来事は数えきれないほど起きています。狂信的な受け取り方だとか熱狂的な空想だとか言っただけのわけにはいきません。どれも、勝手な想像や勘違いでもなければ、根も葉もない空想でもないのです。手術の必要がなくなったというような話は、各国の宣教師たちがたくさん町々から絶えず報告してきます。このようなことは、国の内外を問わず遠く離れた地の様々な環境のもとで大勢の人々に起こっているのです。

すみやかに癒えた例は数多くあります。その範囲も、視力、聴力、不具、内臓器官、皮膚、骨など体のあらゆる部分に及んでいて、治る見込みのない病気が癒されてきました。私たちは現代の医師が優れた技術と、多くの知識を得ていることに言い尽くせぬ感謝の念を覚えますが、医師や病院が治したと信じられている数々の病は、祈りにより、または神権を通して、実は主が癒されたにほかなりません。医師の施す治療は大なり小なり「助力」でしかないにもかかわらず、一般に私たちは全面的に医師のお陰で治ったと思込みがちです。

癒すのは医師ではないということを銘記しておかなければなりません。医師は病気の治りやすい環境と状況を提供し、人が神より授かった自然の治癒力を働きやすくするにすぎません。骨を整形し、殺菌し、傷口を縫合し、巧みな手さばきで体内を開閉し得るとしても、本当の意味で病気を癒すことができるようになった人間がいるわけではありません。神の子である人間はその

内に天与の治癒力を宿しているのです、神権の力と祈りを通して癒える過程が促進させられたり活発になったりするのです。とは言え、重ねて申しますが、そのような驚くべき治療を施すべく訓練を積んだ偉大な医師たちの技術や忍耐、理解力に私たちは非常に感謝しています。

最初にまず医師のところへ行き、万策尽きて後に長老たちを呼ぶ人が大勢います。しばしば長老たちは医師が手を施し尽くした後に病院に呼ばれ、癒しの儀式を行なうようになります。そのようにして病人が快方に向かうと医師の処置が良かったのだと言い、逆に死んでしまうと神権の効力はどうなったのかと疑いを起こします。しかしこのことを忘れてはなりません。すなわち主が即座に癒されようと徐々に癒されようと、あるいは手術や手当てを施そうと、施すまいと、癒しそのものはなお主の奇跡であるということです。医師たちは集積された現代の医学知識を得ようと勤勉に努めているわけですが、私たちの体を創られた御方は、創世の初めから、肉体を再生し、再組織し、治癒する方法を御存じであることを忘れてはなりません。

長老たちが祝福した後で、病人が快方に向かわなかったりすると、失望するばかりか、時には信仰さえ弱くなってしまう人々があります。特にたびたび祈り、長い間断食をしたような場合にはなおさらです。この場合もやはり、いつの時代でも病人や苦しんでいる人々がすべて癒されたのではないことを思い起こす必要があります。初期の偉大な使徒たちでさえ「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」

と問うたのですが、主の答えは必ずしも非難めいたものではなかったようです。「このたぐいは、祈りと断食とによらなければ、追い出すことはできない。」(マタイ17:19, 21)

使徒ペテロと他の同僚たちは数々の奇跡を行ないましたが、多くは記録として残されています。記録の中には死者を蘇生させたことさえ載っていますが、癒してもらおうとしてやって来たすべての人が癒されたのではないことは明らかです。同様に天においても地においても一切の権威を得ておられた救い主でさえすべての人を癒されたわけではありません。主がそうできたことは疑う余地はありませんが、受ける側に「癒される」ための信仰が欠けていたのです。郷里のナザレではあまり信仰が見られなかったため、主はほとんど奇跡を行なわれませんでした。主はナザレで成長されました。しかし、あまり敬われなかったため「彼らの不信仰のゆえに、そこでは力あるわざを、あまりなさらなかった」(マタイ13:58)のです。主が人々を癒されなかったのは、おそらく彼らが癒してもらおうとしなかったからでしょう。

死は人生の一部であり、人は皆死ななければなりません。時の終わりに至らなければ、病気や死に対する完全な勝利はありません。しかし、医学は長足の進歩を遂げ、人間の寿命は伸びました。乳児の死亡率が低下し、出産も安全になり、その上、昔に比べて一般に多くの人々が長命を保つようになりました。このような偉大な業績を残した勤勉な科学者たちに私たちは感謝しています。しかし、死は必ず訪れます。死な

なければ復活はあり得ず、不死不滅の体を得てさらに進歩することもあり得ません。死の訪れ方は急速に変化しているようです。病床だけでなく、往来や道路わき、時には狭谷においても交通事故で命を落としたりします。いずれにしても死は必ず訪れるのです。

もちろん適切な方法を用いて可能な限り死期を延ばすことはできますが、死ぬ日は必ず到来します。しかし高齢者や治る見込みがないと思われる人に対してでも、祈り、祝福を施すことは正しいと思います。私たちには定められた死の時がいつなのか、次の世に行くべき時がいつなのかかわからないからです。ですから始めから終わりのことを知り、それが正しい限り癒すことのできる主の精神とみこころに従って、祈り、祝福をします。しかし定められた死の時が来ればもはや癒しはあり得ません。もちろん、死ぬ時期が延ばされたという例外もあります。顕著な例のひとつに延命を願って、さらに15年この世にとどまることを許されたヒゼキヤ王の場があります。15年の後、王は次の世に赴きました。私たちの中にも、篤い信仰があったために命を永らえた人は大勢います。しかし思慮深い人であれば、軽々しく、不適切な方法で主に延命を願うことが度々あることに気づく必要があります。時には命を永らえることが、かえって苦痛を引き延ばしたり、当然受けべき特権を失ったり、負担をかけたりにすることにもなります。結局、その願いが不当な願いではない時にのみ、正しい祈りを捧げ、祝福を施すことができるのです。しかし、時には、不当な願いによって肉体が

癒え、心は不健全なままになることもあります。また、死にもしなければ、生きもしないという場合もあります。私たちの知恵や判断力が神権の偉大な力と同等にならない限り、主にどのようにしていただくべきかを知るためには細心の注意が必要なのです。もし私たちの主張ばかりが通るとしたら、死ぬ人はだれもいなくなるかもしれませんが。逆に、もし私たちが神権の力と同等の知恵や思慮分別を持つところまで成長す

私は教会には癒しの力があり、
主の祝福により
大勢の人々が癒され、強められ、
健康を回復していることを
知っています。

ることができれば、本人や周囲の人々のためにその人はずっと早くこの世を去るかもしれせん。

人間はときどき感情的になり過ぎたり、熱心になり過ぎたりして、すべての出来事を奇跡のためだと思ったりします。また過度に空想的な人々や熱狂的な人々がいると思えば、数々の癒しの中に奇跡を見ることのできない人々も大勢います。そのような人々は「あれは、奇跡でなくとも結局は治ることになっていたのさ」と言います。一例をあげましょう。

主は弟子たちを前にして言われました。「ああ、信仰の薄い者たちよ。」(マタイ 6 : 30) 私たちすべてがそうなのではないでしょうか。かつて私は家を遠く離れた土地で、

3日の間、激痛をこらえていたことがありました。とうとう私は同僚のハロルド・B・リー兄弟にそのことを打ち明けました。彼は睡眠薬をひとつくれて、ベッドのわきにひざまずき、祝福を施してくれました。私は痛みのせいで3日前の晩からほとんど睡眠がとれなかったにもかかわらず(午前3時頃でしたが)、祝福を受けた次の瞬間にはすぐ眠りに落ちてしまいました。多少恥ずかしい気持ちで打ち明けますが、翌朝目が覚めて最初に思ったことはなんとよく効く薬だろうということでした。ところがふと気がつくともう薬が切れているはずの時間です。でも痛みがまったく戻らないのです。私は良心の呵責^{かじく}を覚えてひざまずき、主よりも薬に頼っていたことに許しを求めて祈りました。その後、数カ月経過しても、痛みも苦痛もありませんでした。まことに恥ずかしい話ですが、おそらく同じような経験をした方は大勢いらっしゃるのではないのでしょうか。ああ、なんと信仰の薄いことでしょう。「A兄弟は癒されなかった。」「B姉妹はよくなったけれど、ずいぶん長くかかった。」「何をしてもいずれC兄弟はよくなったのさ。」

数年前に私が外科手術を受けた時のことです。医師や看護婦たちが手術の開始を待って私の周りに集まっていたので、まだ意識のあった私は専門医にこう言いました。「今朝は信仰の深い大勢の人々があなたのために祈っていますよ。」すると彼は落ち着いて答えました。「私には彼らの祈りが必要です。」彼らの祈りが聞かれたので、医師の手に落ち着きと導きが与えられ、判断力が高められ、その後、私は快方に向かい、使

用に耐えられるだけの声を取り戻せたのです。このことは主の祝福があったためだと私は固く信じています。しかし、懐疑論者は別の見方をするでしょう。

宣教師たちから彼らの施した儀式によって起きた奇跡について聞く時、私はひやりとすることがあります。まるで自慢するようなその話しぶりに、私は主が喜び勇んで帰ってきた七十人に与えられた戒めのことを思い出すのです。

「しかし、霊があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしるされていることを喜びなさい。」(ルカ10:20)

私は、主の怒りに触れて自分に与えられた主の力を取り去られることのないように、自分が器となって行なった奇跡を誇ることを恐れます。

祝福はこれを受けた人のものですから、証をしたいと思うのは当然ですが、これを誇るようにまでなると不自然であり厚かましく思われます。私たちはだれも癒すことなどできないからです。ただ神権を通してのみ主の癒しが結果となって表われてくるのです。按手を施したのがだれか口外しないように病人に指示しておけば、そのことを自分の誇りにしようとする誘惑をしりぞけやすいでしょう。いかなる場合もすべての栄光を天の父に帰するにしなければなりません。そのようなやり方は救い主の生涯と一致しているように思われます。主は数々の癒しの後に次のように命じられました。「だれにも話さないように。」また、嘆願するらしい病人におっしゃいました。「そうしてあげよう、きよくなれ。」するとらい

病はただちにきよまり、イエスはこのように言われました。「だれにも話さないように、注意しなさい。」(マタイ8:3-4)

私は教会には癒しの力があり、主の祝福により時には人間の技術を用いて、また時には用いずに大勢の人々が癒され、強められ、健康を快復していることを知っています。

私たちは、まず自分自身でできることをすべて行なわなければなりません。食事を制限したり、休息をとったり、効果のわかっている薬草を用いたり、特に軽い病気に対しては常識を働かせます。その後信頼のおける長老、ホームティーチャー、隣人または友人などに来てもらうとよいでしょう。普通はこれで十分であり、数多くの人人が癒されています。難しい事態の場合には、適切な援助を与えてくれる熟練した有能な医師のところへ行きます。ある若い婦人は大手術のために病院へかつぎ込まれて、恐ろしさのあまりすっかり緊張していました。彼女の語るところによると、翌朝に手術をひかえたその晩、担当の医師が彼女のもとを訪れ、神殿に参入してきたことを告げました。彼女は、主の見守りと正しく信仰のある人の腕の中にあることを知って緊張が解け、平安な気持ちになりました。

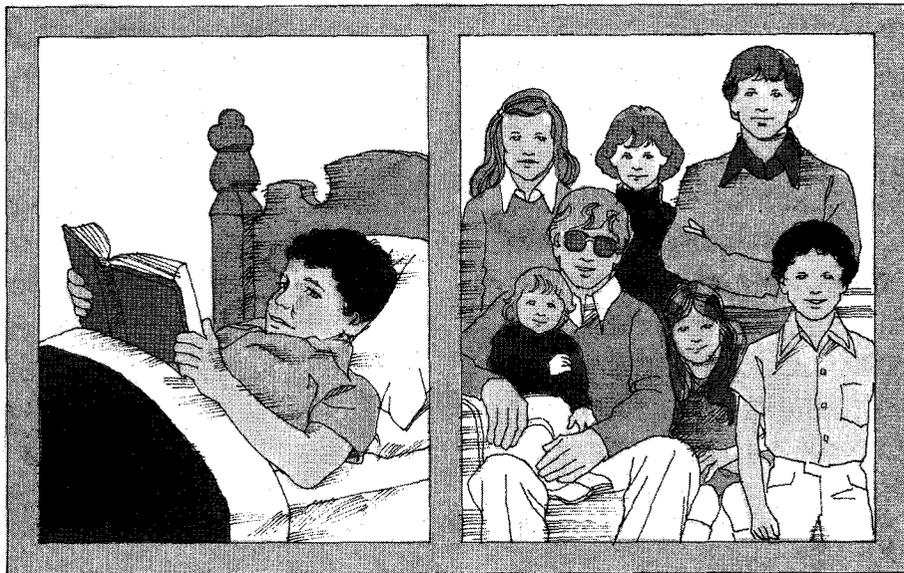
懐疑論者に惑わされて奇跡的な癒しに対する信仰を失うことのないようにして下さい。現実におびたしい数の奇跡が起きています。奇跡は神聖なものです。いちいち記録していたら、いくら書物があっても収めきれないでしょう。奇跡は単純でも複雑でもあり、緩慢に進むこともあれば、瞬時に起こることもあります。いずれにしても奇跡は現実に起きているのです。



ちい

小さなお友だちへ

とも



かわってるっていいな

お話し：サンドラ・スカウソン

エリックは、ほかの子とはちよつとかわっていました。でも、それがいいのか、わるいのか、よくわかりませんでした。朝早く目がさめてしまって、おとうとたちをおこさないように、ベッドの中でおとなしくしていなければいけないときには、よくそのことを考えました。

時々、エリックは、じぶんの赤いち

ぢれ毛のことを考えました。それに、
どうしてみんなが「あーか毛、赤毛、
火みたいな頭」なんていうのが、とか、
友だちのアンディーにはじぶんのへや
があるのに、どうしてぼくは、おとう
とたちといっしょにへやをつかうのか
なとか考えました。エリックは、みん
なとちがうのがいやでした。ちがうの
は、かみの毛や早おきのしゅうかんだ
けではありませんでした。ほかの子た
ちは、ひとりかふたりしかきょうだい
がないのに、エリックには7人のき
ょうだいがいました。まだありました。

プライマリーに行っているのは、学
校中でエリックだけでしたし、日よう
日にあそばないのも、家のちかくでは
エリックだけでした。

でも、少したつと、ほかのことを考
えはじめました。あと2週間、8さ
いのたん生白が来るのです。エリック
は、朝おきると、バプテスマのことを
考えました。白いふくを着て、氷の中
におりて行くのです。そうすると、お
父さんがまっけて、手をさしのべて
くれるでしょう。そう考えるとたのし
くなりました。

ある日のこと、学校からのかえり道、
エリックはアンディーとバプテスマの
ことを話しました。「ねえ、きみは8さ
いになったらバプテスマをうけるの。」
エリックは聞いてみました。

「ぼくそんなことよくわからないよ」

とアンディーは言いました。

エリックは思いました。ぼくはやっ
ぱりかわってるんだ。

すると、アンディーがたずねました。
「きみは、8さいになったらバプテス
マをうけるのかい。」

エリックはアンディーを見ながら考
えました。アンディーはいい友だちだ
から、バプテスマのことを話しても、
ぼくをからかったりしないだろうな。
エリックは言いました。「うん、あと
2週間したら、バプテスマをうけるん
だ。」

エリックは、いいことを思いつきま
した。「ねえ、ぼくのバプテスマ会に
来ないかい。お父さんがぼくにバプテ
スマをしてくれるんだ。きみもお父さん
といっしょに来てもいいよ。」

とうとうエリックのバプテスマの日
になりました。エリックの家族はみんな
教会に行きました。アンディーもア
ンディーのお父さんも行きました。

バプテスマの前に、みじかい会があ
りました。さいしょに歌を歌って、そ
れから、イエス様のバプテスマのお話
や、イエス様にしたがることがいせ
つだというお話がありました。

イエス様もかわってたん、とエリ
ックは思いました。そう思うと、とつ
ても、ほっとしました。

バプテスマの時が来ました。何もか
もエリックの考えていたとおりでした。

つめたい氷が、こしのあたりまで来ました。それからしばらくの間、エリックは何も考えませんでした。ただ、お父さんの声が聞こえ、お父さんのあたたかい手とつめたい氷がエリックをつつみました。

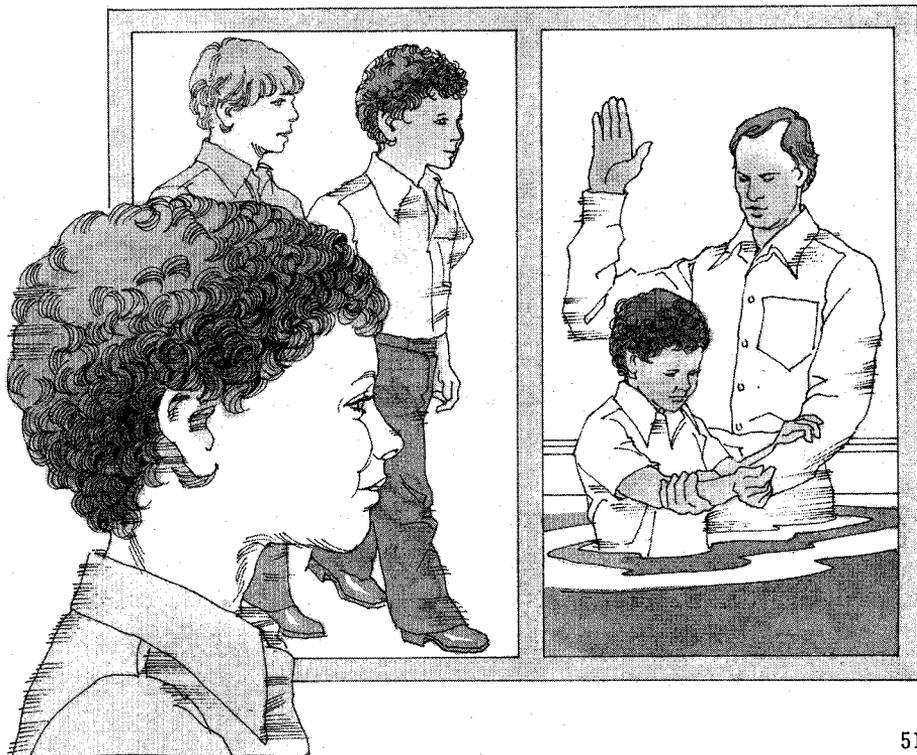
パプテスマがおわって、ふくを着がえ、エリックはみんなとあく手をしました。それから、お田さんがぎゅつとだきしめてくれました。エリックとエリックのお父さんは、へやへもどって来て、アンディーとアンディーのお父さんに会いました。ふたりとも、よるこんでいるようでした。お父さんは、アンディーのお父さんとあく手をして

言いました。「おいで下さって、ありがとうございます。」

すると、アンディーのお父さんはいいました。「とてもよかったですよ。わたしが考えていたような会とは、ぜんぜんちがっていました。」

それから、アンディーのお父さんは、エリックのほうをむいて、エリックとあく手をしました。パプテスマは、エリックだけではなくて、アンディーにも、アンディーのお父さんにもとても大切なものだったんだ、とエリックは思いました。

エリックは思いました。かわつてるといいこともあるな。





オー
 デビッド・O・マッケイ
 1873-1970

19^{ねん}51年、デビッド・O・マッケイ
 大管長^{だいかんちやう}は、こうおっしゃいまし
 た。「私は子供^{こども}のころ、予言者^{よげんしや}ジョセ
 フ・スミスが示現^{しげん}を受けたことをなん
 のためらいもなくしんじていました。」

それから大管長^{だいかんちやう}は、ユタ州^{しゆう}ハンツピル
 の農場^{のうじやう}での子供^{こども}のころのことを思い出
 して、こう話^{はな}されました。

「まだほんの子供^{こども}のころのことです
 が、ある夜^よ、わたしはひどくおびえて

いました。父は家畜の世話が何か仕事があつてゐるすて、わたしはねむることができませんでした。家の近くでおそろしい音がしたような気がしました。母はべつの部屋にいましたし、弟のトマス・イーはわたしのかたわらでぐすりねむっていました。わたしは、とてもこわくなりました。そこで、父や母が教えてくれたこと、つまりお祈りをしようと思ひました。しかし、ベッドから出て、ひざまずいてお祈りをするにはできなかつたと思ひました。

しかし、やつとのことベッドから出て、ひざまずき、母や家族をお守り下さいと神様に祈りました。そうすると、今わたしがみなさんに話している声のようにはつきりとした声が聞こえました。「おそれることはない。だれもあなたをきづつけはしない」と。それがどこから来たのか、何なのかが、わたしは言ひません。皆さんが考へて下さい。それは、わたしへの直接の答へでした。その声を聞いてから安心した気持ちになりました。」

いつも優秀な学生であつたマツケイ大管長は、わずか20さいでハンツビル小学校の校長になりました。彼は背が高く、力もあり、機敏で、ユタ大学ではフットボールの選手でした。

マツケイ大管長は一生の間ずっと教育者として活やくし、社会にあつても

教会にあつても、また理事としても教師としても、いろいろな教育関係の仕事をしました。また、聖典を愛し、理解し、すぐれた文学、特にシェイクスピアの作品や、マツケイ大管長の先祖の地であるスコットランドの詩人ロバート・バーンスの詩を好んで読みました。

64年間、マツケイ大管長は教会幹部として働きましたが、そのすばらしい指導を受けたすべての人々は、心から感謝しました。またマツケイ大管長は、大管長会の責任を受けていた間に1,500万キロも旅をしました。「いつもいそがしく隣人のために働くこと」それがマツケイ大管長の幸福のひけつでした。

マツケイ大管長は心のあたたかい、やさしい人で、子供がことのほか好きでした。子供たちもマツケイ大管長が好きで、喜んで大管長のそばへ行きました。大管長はいつも人々に対して礼儀正しく、69年もの間いっしょに生活した奥さんに対しては、親切なやさしい心づかいをし、すばらしい模範を示しました。

マツケイ大管長は90さいになつても健康で、時間がとれると、子供のころ住んでいたハンツビルの家へ帰りました。そして愛馬ソニーボーイに乗つてよく知っているあたりの野原を歩きまわつたものでした。



ジェームズ・M・パラモア長老より

小さなお友だちへ

文：ジョリーン・メレディス



パラモア長老は、こんなお話をし
て下さいました。「わたしの母は、
めったにいないすばらしい人でした。
母は、天のお父様にぜったいてきな信
仰をもっていました。父が教会に活弁
になるようにと祈ると、ほんとうにそ
うなりました。父はとても強く、信仰
ぶかくなり、すぐれた指導者になりま
した。母は、もっと大ぜいの子供がほ
しいと祈りました。それは、母にとっ
てとりわけむずかしいことでした。そ
れでも母は、6人の子供をもうけまし

た。

父もとくべつな人でした。わたしが
若いころ、父はわたしが歯科技工師に
なれるよう、いろいろと教えてくれま
した。ですから、わたしが歯科技工師
として働きはじめた時には、ほかの技
工師たちがわたしの所へ技術を学びに
来るほどでした。

また、パラモア長老はこんなお話を
して下さいました。「パラモア家にはす
ばらしい先祖がいるのですよ。祖母は
8さいの時にたったひとりで、デンマ

ークを旅立ったのです。祖田の母親は祖田の首にユタへつれて行ってくれるようにと書いたふだをきかけて、船にのせたそうです。祖田がニューヨークに着くと、手はずをとのえて、まっていたモルモンモルモンの宣教師せんきょうしが、ユタ州のエアライムへ行く汽車きしやにのせてくれました。8さいの子供こどもにとっては、どんなにこわいことだったでしょう。それを思うと、わたしはなみだが出てくるのです。

8さいの子供たちにおけて、パラモア長老ちやうろうはこうおっしゃっています。「前にかんとくをしていた時とき、わたしは80人もの子供たちとめんせつし、その子供たちのバプテスマを見ました。めんせつするとき、バプテスマのじゆんびができていないと感じた子は、ひとりもいませんでした。8さいの子供たちは、せきにんがとれます。また、よいこととわるいことのくべつができます。キリストの光ひかりによって、何が正しいかがすぐにわかるのです。いつも正しいことができるようになるためには、自由意志じゆういをくんれんしなければなりません。しかし、8さいの子供には正しいことをえらぶ力ちからがあります。わたしは何度も何度もそのしょうこを見えました。

世界中の子供たちに、天のお父様のメッセージを知ってほしいと思います。天のお父様は、天のお父様をしんじ、お友だちを愛するようにおっしゃっ

ています。どうぞ愛のせいしんをもちつづけて下さい。みなさんは、けんそんで、すなおです。愛とは、いつまでもこだわらないことです。たとえば、人をうらんだりしません。いやなことはすぐわすれることができます。それに、みなさんをいじめる人を愛しつづけることだってできます。愛とは、人を思おもいやること、気づかうことです。また、その人のために何かをしてあげることであります。ふたりの人が、おたがいに愛をもっていると、しんらいのきずなができ、自分のかちがわかるようになります。また、どんな問題でもいっしょに考え、かいつしていくようになります。

「みなさんは、人から何とされたいですか。神様に対して、しっかりとした信仰しんこうをもっている人だと言われたくはありませんか。それから、正直な人、また、しんらいできる人だと言われたくはありませんか。今まであげたものは、どれもすばらしい特質とくしつですが、すべての人を愛する人だと言われることは、何よりもすばらしいことではないでしょうか。」

「救い主すくぬしが、神様を愛しなさい、また、隣人りんじんを愛しなさいとおっしゃっていることを証あかしします。また、もし永遠の生命えいゑんを受けなければ、人々を愛することができるようにならなければならぬことを証あかしします。」

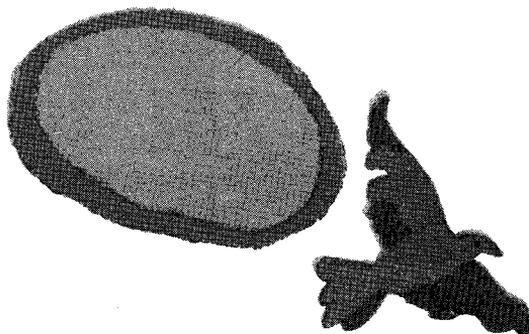
「ごらんよ、ミツオシエがいるよ。
あとについて行ったら、ミツ
が見つかるよ。」キルマニは、大声でお
とうとのスクにいきました。

アフリカにすむキルマニとスクは、
クハキというパンツをはいて、村はず
れでライオンがりごっこをしていま
した。

ミツオシエ の わけまえ



お話：カイ・エル・ハーベイ



「ティエ(いそげ), ティエ」とスクは、せかせました。

ふたりは、やりをほうり出すと、お田さんのところへ、ミツを入れるヒョウタンをとりにかけてしました。

「鳥にもミツをのこしておいてやるんだよ。」お田さんがうしろから言いました。

「ニジヨ(うん)。」スクは答えました。キルマニは、わらいました。

「鳥にもミツをのこしておかないと、何かあぶない目にあうなんて、むかしのいつたえをしんじているのかい。」

「だって、アブーのお父さんは、どうなったと思う？鳥につれて行かれて、ヒョウの谷にほうりこまれちゃったんだよ。」

スクはヒョウタンをもち、キルマニは、たいまつをもって歩いていきました。

小さなはい色の鳥が、まるで、ついておいてというように、ふたりの前を行ったり来たりしています。

「見ろよ。道にそって進んでいく。」キルマニはこうふんして、さげびました。

スクがキルマニに走りよると、鳥はコケのはえた木のえだにとまりました。ハチはむれをなして、木のみきにあいた小さなあなに、出たり入ったりしています。「鳥がミツのありがたさを教えてくれたんだ。」スクは手をたたいてよろこびました。

キルマニが、木のあなにアセガイ(やり)をつっこむと、くさりかかった木がカタむき、大きなあながあきました。キルマニは、中にたいまつをおしこみ、おこったハチをいぶり出しました。

こうして、キルマニとスクは木によじのぼり、ほうでハチミツをかき出して、ヒョウタンに入れました。鳥は、ものがなしい声でなきながら、ふたりの頭のうえをとんでいます。

スクは、手のとどくかぎりのハチミツをあつめてしまうと、木をすべりおりました。でもキルマニは、さいごのひとつくいまでもすくいとりました。

「バカな鳥のやつめ、ミツなんか、ないよーだ。」キルマニは、ふてぶてしくいきました。

鳥は木のえだにとまりましたが、筒もなく、なきながらとんで行ってしまいました。

キルマニはいいました。「鳥のやつ、ぼくたちのきげんをとっているんだ。またべつのハチのすの方に、あんないしてくれるかも知れないよ。スク、お前、まだしんぱいしているんじゃないだろうな。それ、おいかけよう。」キルマニは走りだしました。

スクは不安でした。ぼくたちは、だんだんにジャングルのおくふかく入って来ている。やっぱり、鳥にハチミツをのこしておいてやらなくちゃいけなかったんだ。スクは、しぶしぶ、あと

について行きました。

と、とつぜん、メリメリと木がおれ、バサーツとたおれる音がして、おびえたキルマニのひめいが聞こえました。スクは走り出しました。ふと見ると、キルマニが董い木のえだに足をはさまれているではありませんか。スクは、アセガイ（やり）をてこにして、キルマニの足をはずそうとしましたが、やりのえがおれてしまいました。

「ああん、死にそうだよお。むかしのいいたえは、ほんとうだったんだ。鳥のやつが、しかえしたんだ。」キルマニはうめきました。

「お父さんに言うてくる。」そういつて、スクはアセガイ（やり）をキルマニの手にもたせ、たすけをよびに走り出しました。

キルマニは、いたさにうめき声を上げました。身動きもできず、ジャングルのなかひひとりぼっちで、どんなあぶないめにあうかわかりません。鳥のやつ、ヒョウをつれてぼくをころしに来るかもしれないぞ。キルマニは、びくびくしながらあたりを見まわしました。鳥は、キルマニの頭の上のえだにとまっています。

「まだ、ヒョウを見つけに行つてはいなかったんだ。ミツの入ったヒョウタンを見ているだけだ。」キルマニは、少しほっとしました。

キルマニのヒョウタンは、すぐちか

くにころがっていました。キルマニはアセガイでヒョウタンをちよつとつつき、ミツをこぼしました。すると、鳥がまいおりてきて、こはく色のミツをなめはじめました。

まもなく、スクがお父さんやそのほかの人たちといつしよにかえつてきました。みんなは、キルマニの足をおさえつけていたおもいえだをとりわけ、木のつるでたんかを作り、キルマニをのせて家へはこんで行きました。

アンドリユー兄弟に手当てをしてもらいながら、キルマニはハチミツをとりに行ったことを話しました。すると、アンドリユー兄弟は言いました。「もうわかっただろう。鳥のやつはおなかがすいていたので、きみをべつのハチのすの方へつれて行こうとしたんだよ。鳥のやつは、じぶんでハチミツをとることができないんだ。それなのに、きみはハチミツを、ぜんぜんのこしておいてやらなかったんだろう。ハチミツのある所をおしえてくれた鳥にも、わけてあげなくちゃいけないと思わないかい。」

キルマニは、はずかしくなりました。

「スクは、ミツオシエに少しのこしておいてやろうとしたんだ。でも、ぼくはどうしてそんなことをするのかわからなかった。これからは、ミツオシエがミツのありかをおしえてくれたら、少しのこしておいてやることにするよ。」

インタビュー・菊地良彦長老に聞く

この度、菊地良彦長老は管轄区域が日本・韓国からユタ州ソルトレーク盆地の南区域に変更になり、ユタ州に転居することになった。引っ越し準備に忙しい中、時間を割いていただき、長老の現在の心境、若人へのメッセージなどを伺った。

●菊地良彦長老が日本人として初めて教会幹部に召されたのは、1977年10月。1978年の7月から日本・韓国地域代表役員としてこれまで4年間日本を管理し、日本の教会発展のために精力を傾け、手腕を振るつた。登志子夫人との間には、4人の子供がいる。上からサラさん(17歳)、リナさん(14歳)、ルカさん(12歳)、又意くん(8歳)。



《80のステーキ部を管轄》

—この度の新しい責任についてお話し下さい。

「教会の方針によってすべての教会幹部はソルトレークに住むようになりました。代表役員として担当地域を管理する期間は2年から3年なのですが、私の場合は特別に許可をいただき4年間務めさせて頂きました。私に代わってウィリアム・R・ブラッドフォード長老が代表役員として日本を管理なさいます。」

—今度はユタ州の南部の方を管轄なさるそうですが。

「ええ、ソルトレーク盆地の南半分を担

当します。全部で80のステーキ部があります。」

—アメリカに移り住まれることは以前から予想されていきましたか。

「ええ、召された時、大管長会は『あなたは日本だけの幹部ではないので、将来北極か南極へ行くようになるかもしれませんよ』と冗談に言われていましたから……。—ご家族のお気持ちはどうですか。

「やはり日本人ですから日本にずっといたいですし、子供たちもこちらにたくさん友達がいいますからね。でも子供たちは、神様の仕事なら、お父さんやお母さんの行く所へ喜んで行きますと言ってくれました、また8歳になる長男が、魚つりに連れて行

ってくれるならどこにでも行きますと言ってくれました。ユタ州にはつりのできる所がたくさんありますので、楽しみにしています。」

—父親としての役割を果たされる時に、大変忙しいスケジュールの中でどのように調整を図られていますか。

「ステーキ部大会の外12の伝道部へも年に2度訪問させて頂きますから、子供たちと過ごせる時間は本当にわずかしかなかったりませんので、家にいる時は密度の濃い交わりをするようしています。それに子供たちはお父さんの仕事が大変な仕事だということを理解してくれて、とても協力的です。この間私の妻が助けてくれたことにとても感謝しています。」

—お子さんから要望されることは、どんなことですか。

「父親参観日、運動会、学芸会とかいろいろありました。今までは教会の仕事で行けない時がありましたが、今度ユタに行ったら子供たちのためにもっと時間をとれるようになるかもしれませんね。」

《青春を思い切り燃え立たせて》

—若い人たちに、メッセージを頂けませんか。

「日本は第二次世界大戦で何もかも失い、貧しい国でした。それが今、世界的に尊敬を集める国になりましたね。それはひとつに先祖から受け継いできた勤勉さ、誠実さという美徳があったればこそできたことだと思います。」

「しかしながら、福音的な角度から現代社会を見る時、世の中はモルモン経の墮落した民と同じような歩みをしていると思

います。例えば、結婚への神聖な考え方、正直、勤勉、両親を敬うこと、などの美しい日本の道徳観が今や危機にさらされています。うわべは活気に満ちた社会の動きも、土台となる理念が崖が崩れるように崩れ始めています。また人々は大都市のスモッグで汚れた空を本当の空だと思い込んで、美しい空を忘れ、汚れたものを当たり前のように受け入れています。それと同じようにキリストのみたまを感じられないほどに、悪の力があらゆる媒体を通して浸透してきています。

'80年度の警視庁青少年白書によりますと、盗み、薬物、暴行などで26万人が補導されたとあります。潜在的には150万はいるだろうと推定されています。これらの状況を見てみると、私たちの福音以外にこの世の中に救いをもたらす教えはないと感じます。ですから、どうしても福音を広めたいですね。」

「神様の導きとみんなの力で現在のたった7万人の教会員を70万、700万にすることができたらという気持ちがあります。それ以外に私たちの救いのみならず、日本の救いはないように思います。それをするためには、日本の指導者の皆様に時のしるしを覚えていただき、今こそたくさんのローカル宣教師を出して頂きたいと思っています。教義的にも、霊的にも、熱心さにおいても、ビジョンにおいても、一番訓練されるのは伝道に出た時です。たくさんの方の帰還宣教師が定員会や監督会で、あるいは、高等評議員、ホームティーチャーなどとして働く時、教会はもっと大きくなると思います。すべての若人たちに望むことがこの伝道です。宣教師の数によって教会の発展の度合

いが決まると思います。」

「また、インスティテュートでの勉強も大切です。出席できないならば、自分で計画を立て、とにかく福音を系統的に学んで下さい。著名人の自伝とか、薦めなども読んで、世界的な広い視野を持つ必要があります。国際人として日本や世界を考えられる人になって欲しいと思います。」

「教会幹部の皆さんは、日本の聖徒に多くの指導者を出して下さいと言われておられます。神様は私たちに期待しておられます。日本の教会の若人にはその力があります。」

「大管長は『歩みを速めなさい。歩みを速めることにより、私たちは聖められる』と言っておられます。聖められるためには、愛さなければなりませんね。愛することによってこそ自らを聖めることができるのです。兄弟姉妹の皆さん！ 神の勇士になって下さい。日本を救う救い主になって下さい。」

「最後にもうひとこと言わせて下さい。若い人たちはもっとはつらつとして、教会の生活やアルバイト、学生生活をもっと楽しんで欲しいと思います。クリスチャンライフを、モルモンライフをもっとエンジョイして、青春を思い切り燃え立たせて欲しいですね。燃えて、燃えて、燃えて下さい。」
——長い間、一生懸命に責任を果たして下さい。心から感謝しています。日本の教会員もとてもさみしく感じていると思います。ユタに行かれてからもお元気で活躍下さい。ありがとうございました。(取材：「聖徒の道」編集室)

新しく日本担当の代表役員 になった ウイリアム・R・ブラッドフォード 長老(七十人第一定員会会員) の略歴



1933年ユタ州スプリングビル生まれ。ブリガム・ヤング大学卒業。軍人グループリーダー、地方部長、支部長、チリ・サンチャゴ伝道部長を歴任し、1975年に教会幹部に召された。伝道部長に召される以前は、テキサス州マカレンにあるインターナショナルフルーツグローアーズ・アンド・シッパーズ社の社長であった。この度の日本担当代表役員の責任を受けるまでは、同じ代表役員としてメキシコ北部を担当していた。1954年に専任宣教師として日本で伝道した経験がある。メアリー・アン・バード夫人との間に6人の子供がいる。



●●●菊地長老との出会い 支部長をされていた あの頃



東京南伝道部伝道部長
井上 龍一

私が、初めて菊地長老にお会いしたのは1965年10月のことでした。当時、菊地長老は伝道を終えて帰って来られてから、吉祥寺の東京西支部で支部長をされ、また同時に、学生であり、夫であり、父親であるという幾つかの責任をよく果たしておられました。いつも忙しそうにしておられましたので、求道者の時にはあまりお話す機会がありませんでした。しかし、私のバプテスマ会では、確認をして下さり、心の込もった祝福をいただきました。そして、私はアロン神権の執事、後に祭司の聖任も、菊地支部長から受け、結婚式の司式をもしていただきました。その後、公私共に長年にわたり、あまりにも多くの愛と関心を示していただきましたので、感謝のすべてを短い

文章で述べることはとても難しいことです。

支部長は私がバプテスマを受けて後、すぐに神権昇進セミナーを開いて下さいました。テキストも満足にない頃でしたが、菊地支部長は、自ら素晴らしいテキストを編集され、私たち未熟な者を熱心に指導して下さいました。神権組織を強めようとの熱意は、聖徒一人一人に伝わり、教会の出席数は増加し、素晴らしい効果を上げました。聖餐会での彼のお話や、日曜学校での力の込もったレッスンも、聞いている私たちを感動させずにはおきませんでした。あれから16年の月日が流れました。私は今でも毎日のように菊地長老から多くのものを教えられています。

この度、菊地長老の担当が変更になり、ユタに移られることを知り、本当にびっくりしてしまいました。やがてはこの時が来るのではないかと思っではおりました。しかし、いざその時になってみるとおめでとうございますと申し上げねばならないのですが、何かさみしさを感じてしまいます。

これまで日本で生活して来られたご家族にとって、ユタに移られることは本当に大変なことでしょう。ご家族の皆様が早く新しい環境に慣れますように、また菊地長老のなおい層のご活躍を心からお祈り致します。(いのうえ・りゅういち 1943年生まれ)



菊地長老との出会い ●●●

ハガネのように
ビロードのように



東京南ステーク部恵比寿ワード部
鹿山 スサナ

私は、約2年間、菊地長老の秘書として、地域管理本部で働く機会がありました。その2年間は、私にとってこれまでの生活の中で、最も忙しく、またチャレンジに富んだ日々でした。と同時に、霊的にも高められた時でもありました。

菊地長老から直接に多くのことを学ばせて頂きました。彼は日本人として、日本をとて誇りに思っておられ、日本の教会の成長のために東奔西走し、なみなならぬ情熱を注いでおられました。身を粉にして働いておられた姿に、ソクラテスの「世界を動かしたいと望む者は、まず自らを動かせ」と言った言葉がしみじみと思われました。

「私には病気になっているような時間は

ないんですよ」と笑っておられたお顔が印象深く残っています。

彼は、独学でかなりの英語力をもっておられました。それでも自由に英語をあやつるのは困難なことでした。しかし、努力家の菊地長老は短期間のうちに、驚くほどの力をつけられました。

また、その卓抜した指導力は、ひとつのビジョンを持ったなら、それを成し遂げるまで真心から祈り続け、努力を続けるという頑張りから得られたものだと思います。

私にとって菊地長老は、父親のようでもありました。特に結婚に関しては数多くのアドバイスをいただき、東京神殿で結婚する時には儀式をも執り行なっていただきました。また誕生日には必ずプレゼントを下さるなど細やかな心遣いを忘れない方でした。

読書好きで几張面な奥様を愛し、尊敬し、お子様とプールに泳ぎに行くなど子ほんのうな一面を持っておられる菊地長老は、ハガネのようにたくましく、ビロードのような優しさを備えたお方です。私はいつもそのように人々に話していました。

現在の教会幹部の中でも、ジョージ・P・リー長老と並んで若くして召された菊地長老のご活躍を心からお祈りしています。離日されるのはさみしいですが、日本の偉大な指導者が全世界の教会のために働かれる姿を目にできるのはとても大きな喜びだと思っています。(かやま・すさな 1947年生まれ、元菊地長老秘書)

末日聖徒には、悪い噂や 黒い背景がない



鮫島 邦彦

酪農学園大学教授

札幌ステークス部札幌第2ワード部

大学を卒業して数年間、私はある食品総合メーカーに勤めました。その間にも、教会や人々に最も自分が貢献できる仕事は何だろうかと、日々真剣に考え祈り続けました。そんな折、現在勤務している大学に、私の専門分野の研究室が設けられることになり、恩師の推薦を受け研究生活に入りました。

肉製品製造学研究室と名づけられたその研究室での活動は、筋肉タンパク質の分子構造の変化から食品物性を説明しようとするを目的としています。とはいうものの、研究し始めの頃は、自分の専門とは言え、内容がさっぱり理解できず、想像以上の学問の進歩発展に目がまわるような思いでした。と同時に、教会の召しに忠実でありたいという気持ちと、自分の将来への心配や焦りで、いつも複雑な心境でした。

しかし、教会で学んだ忍耐や目標の定め

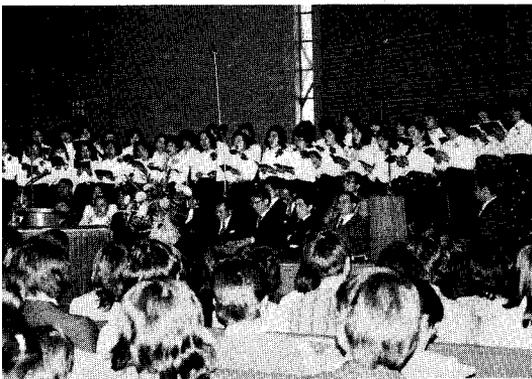
方に従っている内に、みたまの助けによって理解力が深まるのをはっきりと感じるようになりました。正直に、真面目にまた自分の信条に忠実であることによって、素晴らしい友人、優れた先輩、良い同僚に恵まれ、想像以上に急速に研究の進展をみる事ができたことを証致します。

自分の信仰がゆっくりとはありますが次第に強まっていくのを感じるようになったのは、バプテスマ後15.6年、大学を卒業してから11.2年たった頃からです。丁度その頃、カナダのアルバータ州立大学に交換教授として派遣されました。ある会議の席で、「日本から交換教授として来られている鮫島教授は末日聖徒です。ですから彼には悪い噂や黒い背景を見つけることができません」と紹介されました。故ヒュー・B・ブラウン副管長やN・エルドン・タナー副管長を初めとするカナダの末日聖徒への信頼の篤さを示すこの言葉を聞いて、とてもうれしく思いました。そして日本でも教会員が多くの人々の信頼を得ることができるように、自分もできる限り努力しなければと決意を新たにしました。

それ以後も国際的な学会に出席する機会がしばしばあり、世界各国の末日聖徒に会えたことは私にとって励みでもあり、喜びでもありました。もし私が真の教会に属していなければ、このような幸福な思い、満たされた気持ち、平安な心を決して得られなかったでしょう。また勤務先の大学にも毎年10数人の末日聖徒の学生が在籍し、私の研究室にも教会員がいます。彼らは他の学生の良い模範となっており、教会でも熱心に働いている様子は、私に誇りを感じさせてくれます。

自分の研究上の新しい知見がある度に、創造主の能力と真理の奥深さに感嘆せざるを得ません。研究に従事して17年になりますが、まだまだ駆け出しです。これからもしっかり目標を定めて頑張りたいと思っています。毎日の生活は平凡であるかもしれませんが、その中にはたくさんの真理があ

ります。それを見いだすように努力する中に、自分にできる最良の伝道活動があるのではないかと考えています。そしてその真理は、私たちを変えると同時に、真の自由を与えるものであることを心から証します。(さめじま・くにひこ 1938年生まれ、現在札幌ステークス部祝福師)



大阪北ステークス部センター の紹介('81年4月完成)

◀'81年4月、オープンハウスを兼ねた大阪北ステークス部大会

所在地：〒567 大阪府茨木市末広町4番36号
☎0726-33-4200 交通：阪急電鉄茨木駅より徒歩5分。国鉄茨木駅より徒歩10分。

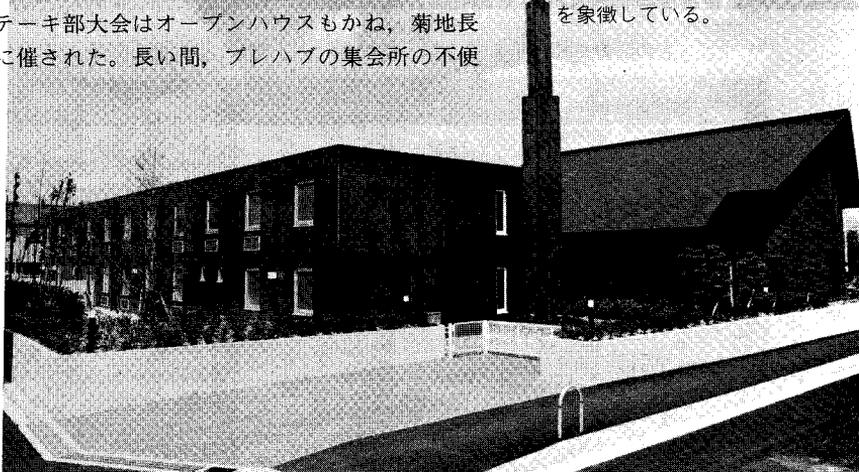
敷地面積：1,000坪

礼拝堂：正面はレンガ作りの壁面。中央にステンドグラスが入っている。説教台は石でできていて、信仰の強さを象徴している。

「関西にも立派なステークス部センターを」という教会員の長年の願望が実り、大阪北ステークス部センターが1981年4月に完成した。ステークス部大会ごとの会場捜しや、音楽祭、スポーツ大会等のプログラムのための広い施設を確保する時などの不便さから、その完成が土地購入以後6年の間、久しく待たれていた。

完成直後のステークス部大会はオープンハウスもかね、菊地長老を招いて盛大に催された。長い間、プレハブの集会所の不便さに耐えてきた茨木・高槻両ワード部の会員にとって、感激もひとしおのオープンハウスであった。

▶大阪北ステークス部センター



お茶の水支部、オープンハウス開く

東京都千代田区の神田駅から歩いて2分、首都の真ん中に東京南ステキ部お茶の水支部がある。古川ビルの地下42坪を借りて、4つの教室、礼拝堂、支部長室、書記室などに間仕切り、集会所にあてている。近辺には、大学、予備校が点在し、この学生街で改宗した学生を中心に約50名が集会に出席している。

去る6月14日から20日までの1週間、お茶の水支部で建物の移転を機にオープンハウスを行なった。

各部屋に、予言者ジョセフ・スミス、神殿、扶助協会などについての展示を行ない、神殿のコーナーでは、特に若い会員の御両親のためスライドを上映。これはソルトレーク神殿の訪問者センターで上映されているスライドを日本人キャストに変えて再編集したものである。教会員の娘が非教会員の父親に神殿の大切さを説明し、いつか自分も神殿で結婚したいとの希望を語り、共に永遠の家族になることを望むといった内

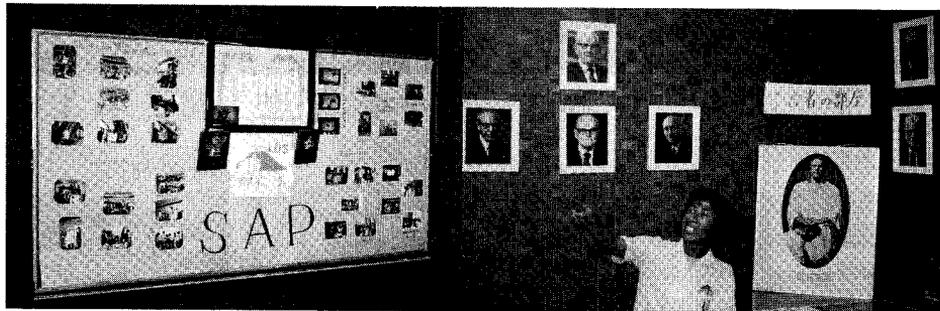
▼独身成人の活動の様子をパネルにして紹介

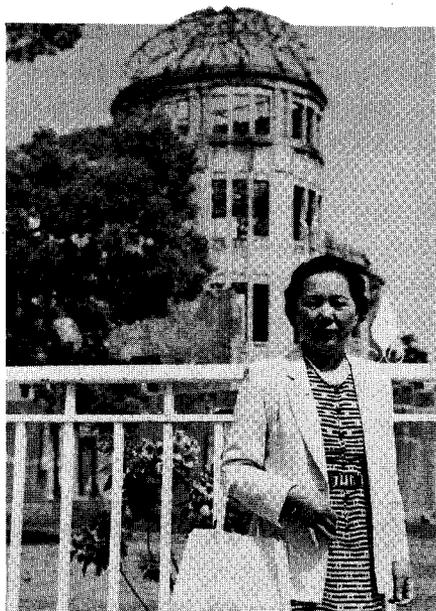
容である。

ハイト支部長は、オープンハウスを終えた後で次のように語っている。「私たちは何カ月も前からオープンハウスのために計画し、準備してきました。1週間のオープンハウスが終わって皆疲れていましたが、素晴らしい成果を上げることができました。オープンハウスに来られて、今まで抱いていた疑問がなくなり、みたまを感じてバプテスマを受けた方もありました。また会員の証は強められ、求道者も増えました。さらにうれしかったのは、約70名の訪問者の内、教会員の家族5家族の訪問があったことです。ある御両親は支部のオープンハウスを楽しんでから、『教会の雰囲気がとてもいいですね。また訪問したいと思います』と言って下さいました。今こそ私たちは、この素晴らしい教会員の両親や家族の改宗に向けて努力すべき時だと思います。

また、最も感動的だったのは、会員が何時間もかけて考え、完成した展示物に、彼らの強い証が表われていることでした。そこには、会員の一致とみたまがありました。秋にも同じような企画をたてたいと思っています。」

▼「予言者の部屋」で説明する兄弟





原爆の炎をくぐり抜けて —神により生かされている喜び—

中村 良子

(広島ステーキ部高須ワード部)

一瞬の内に破壊され、多くの人々が家や物の下敷きになって死にました。それと同時に、いたる所から火の手が上がり、広島町は三日三晩消すすべもなく燃え続け、完全に焼け野原となったのでした。昼だというのに空が暗くなり、黒い雨が降ってきたので、多くの人々は油が降ってきたのだと思って恐怖におののき、逃げ惑い、まるで地獄絵を見る思いでした。

私は火事の熱から逃れるために子供を背負ったまま胸まで川の水につかっていました。そのうちに子供が空腹のあまり泣き出しました。食べ物はもちろん飲む水さえありません。1,2時間は何とかあやし続けましたが、「たあちゃんミズ!たあちゃんミズ!」と4,5時間も泣かれてやむなく汚れた川の水をタオルに浸して口に入れてやりました。ある所で7歳くらいの子供が石の門柱の下敷きになり、助けを求めて泣いていました。私は必死になって助けようと思いました。どうすることもできません。爆風で衣服を飛ばされ、裸でさまよっているたくさんの子供たちを助け、収容所に連れて行きました。

被爆した我が子は全身水ぶくれになり、見るも無惨な姿で翌月の9月9日に亡くなりました。今まで子供のためと張りつめて

戦争の敗色も濃くなった昭和20年8月6日、その日は朝から良い天気でした。朝7時20分頃、警戒警報のサイレンと同時に、国土防衛隊の主人は任務のため家を飛び出して行きました。主人を送り出し、朝の用事を済ませた8時15分頃、2歳7カ月の男の子を抱いて庭先に出ると、B29の爆音があるので空に目をやったその瞬間、強烈な閃光の後、ドカーンという大音響に包まれました。宇宙全体が真っ白になり、熱射と爆風で吹き飛ばされてしまいました。それは、丁度グラグラ煮えたぎるお湯を頭からかけられた感じでした。そして気がついてみると子供と私はひどい火傷を負っていました。一緒に話をしていた隣の奥さんは即死でした。これが世界で初めて落とされた原子爆弾だったのです。ほとんどの家は

いた心の糸がブツンと切れて、完全に生きる望みをなくしてしまいました。その後、私にも症状が表われ、髪の毛が全部抜け落ち、歯ぐきから出血し、何も食べることができなくなりました。また一夜のうち便所に25回も通い、身体中の水分が全部出てしまい、そのため睡眠不足に陥って生きた心地がしませんでした。病院の先生から、もう長くないと言われ、私も覚悟を決めておりましたが、幸いにして主の導きにより奇跡的に快復しました。

戦後15年目の昭和35年10月21日、主人が原爆病（急性白血病）で急死してしまいました。原爆はとうとう私ひとりを残して子供と主人とを奪ったのでした。失意のどん底にあったその年の12月、雪の降る寒い日でした。恵み深き神様は姉妹宣教師を遣わして、真の福音を聞く機会を私に与えて下さいました。私にとっては天使の訪れのように思われました。今後は福音と共に生きることを決心し、翌年の4月にバプテスマを受けることができました。その後、原爆の後遺症に悩まされ、子宮ガンと乳ガンの手術を受けましたが、現在は元気に生かされております。しかし、原爆病であることから、いつ死が襲ってくるかわかりませんので、毎日毎日を大切に生きなければと自分に言い聞かせております。

昭和40年にはハワイ神殿で主人と子供との結び固めを終わり、この上ない平安と喜びを感じることができました。また東京神殿にも参入し、感謝の日々を送っております。「爆心地から900メートルしか離れておらず、しかも、原爆の光った瞬間を目撃し

た人が、今もこうして生きているのは奇跡ですね」と今でも病院の先生が不思議そうに言われます。私は戦火と地獄さながらの中をくぐり抜けてきた者として戦争の恐ろしさ、平和の大切さを骨の髄から知っているつもりです。私が生きていることは奇跡であり、神の導き以外のなにものでもありません。神により生かされている喜びが涙と共に心の底から込み上げてくるのを抑えることができません。日本が、いや世界中が原水爆から守られ、平和であるように、私の魂の叫びとして心からお祈り致します。（なかむら・りょうこ 64歳）



川に幼児が

宣教師、腰までつかって救出

—旭 川—

宣教師がおぼれている子供を助けたニュースは、新聞に掲載されたこともあって、旭川ではかなり多くの人々の知るところとなった。宣教師が伝道していると「ああ、あの子供を助けた教会の人ですか」と立ち止まって話を聞いてくれたとのことである。

6月15日、私は同僚のピンチ長老と土手を歩いていると、100メートル程先の方から女性と4、5人の子供たちが走ってきました。彼らはピンチ長老を見るといきなりこう言いました。

「外人さん、子供がおぼれて流されてい

るんです。助けて。」

私たちはすぐさま川の方に目をやり捜しましたが、すぐには何もそれらしきものは見つかりませんでした。しかし間もなく少年の背中らしいものが水面に見えたので、私は、10メートル程下流に走り、ピンチ長老はそれを追いかけるように川の中に入って行って、子供のシャツをつかんで助け上げました。

この日のことを考えると、とても不思議です。いつもは自転車で伝道するはずのところなのに、一昨日タイヤがパンクしてしまったために、この日は徒歩で伝道しまし

た。おまけに同僚の足にまめができていたので、おそらく近くで伝道するだろうと思っていたのですが、彼は今まで一度も行ったことのない、しかも今までで一番遠い場所に行こうと言ったのです。もし彼がそのように言わなければ当然あの土手も通らなかったはずで。主の導きがあったのだと思えてなりません。人の命の大切さ、生きている喜びを深く考えさせられた素晴らしい経験でした。(レポーター：中塚祐丈長老)

北海タイムス
57. 5. 16

北海道新聞
57. 6. 12



ピンチさんに感謝状

川から坊や救ったカナダ人伝道師

吾等七月廿二日、旭川市牛朱別川に流された坊やを救ったカナダ人伝道師、ピンチさんに感謝状を贈ります。

川に流された坊や危うくセーフ

旭川・牛朱別川

「助けて」願ひ神に通ず

「外人宣教師、お手柄」

「腰までつかり救出」

「五月廿二日、旭川市牛朱別川に流された坊やを救ったカナダ人伝道師、ピンチさんに感謝状を贈ります。」

「五月廿二日、旭川市牛朱別川に流された坊やを救ったカナダ人伝道師、ピンチさんに感謝状を贈ります。」

「五月廿二日、旭川市牛朱別川に流された坊やを救ったカナダ人伝道師、ピンチさんに感謝状を贈ります。」



読者のひま



感銘を受けた「ソマリア」のお話

「ソマリア」。この文字を見つけて、アフリカに興味を抱く私はとてもうれしくなりました。いつものように帰宅する人で混雑する電車の中で、今月号（6月号）の「聖徒の道」を読んでいた時でした。私は現在プライマリーの責任が与えられていますので、「聖徒の道」の子供のページは特に一生懸命読むようにしています。

アフリカは発展途上国の集まりだと言われたりしますが、実は彼らは素晴らしい独自の文化を持っています。そして、とても強い生命力を持って生活しています。そんなことを考えながら読んでいますと、次第にそのお話に引き込まれてしまいます。もし自分の生徒たちがこんな経験をしたらと考えると、いつしか涙さえ浮かんできました。あの大統領の「知っている者は教え、知らない者は学ぼう」という教えが、子供たちを教える責任にある私にとって大きな宝となりました。いつもたくさんのことを学べる「聖徒の道」に感謝しています。（町田ステーク部平塚支部・峰尾秋代・21歳）

指導者の言葉をノートに

私と娘は、毎月「聖徒の道」が届くのとても楽しみにしています。10歳の娘と一緒に読む時にたくさんのことを学び、幸せを感じます。「聖徒の道」は聖典と同様に私に生きる目的と指針を与えてくれます。そして苦しい時、悲しい時には心を癒し、悩んでいる時には解決の道を見いだすこともあります。私にとってとても大切な本です。

出かける時にはいつも「聖徒の道」を持って行きます。電車の中で、病院の待合室で、学校の父母会などで親しくなった方へ差し上げています。友人宅を訪れる時にも持参してとても喜んでいただき、それ以来家族ぐるみでお付き合いしている方々もいます。いろんな方に差し上げてしまうので、「聖徒の道」を読んだ後、指導者の言葉をノートに書き留めておくことにしています。ですからいつでも安心して差し上げることができます。（東京北ステーク部所沢ワード部・坂美智恵・38歳）

★このページへのご投稿をお待ちしています。「聖徒の道」にまつわる出来事、ご感想をお寄せ下さい。また、温かみのあるクリスチャンとしての日常生活を描いたイラストを募集しています。各地域の教会の様子を伝える記事、話題などもどしどしお寄せ下さい。年齢・電話番号もお忘れなく。宛先：〒158 東京都世田谷区上用賀4-9-19/東京ディストリビューション・センター/「聖徒の道」編集室。10月号掲載分締切8月20日。



生ける水

しかし、私と私に与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。」(ヨハネ4:14)

私は「聖徒の道」が大好きです。それは清く冷たい泉の水を飲むように、甘い果実を食するように、心に喜びと潤いを与えてくれるからです。また、いろいろな問題に対する答えを見いだすこともしばしばです。

読むたびに印象に残る言葉や証など多くありますが、6月号の「炎の中で」で大火傷を負いながら火の中から脱出し、その信仰と癒しの儀式によって奇跡的に快復されたスティーブ・チェリー兄弟の証にはとても感動しました。福音に証を持った人々の信仰が国や時代を越えて生き続けているのを知り感動を覚えます。私も同じ末日聖徒として力強く信仰を守り育てていきたいと思えます。(町田ステーク部厚木支部・増田礼子・29歳)

私の信仰の支え

ふたりの素敵な姉妹宣教師に出会って、バプテスマという素晴らしい祝福を受けてからもう1年になります。今、私は両親に反対されて安息日を守れないという状態が続いています。そのような中であって私の信仰を支えてくれるのは、監督御夫妻や、温かい兄弟姉妹の愛、それに「聖徒の道」です。ワード部のある兄弟が私のために、自費で1年分の「聖徒の道」を予約して下さった時は、跳び上がりたいほどうれしかったです。

「聖徒の道」を通して、自分よりもっと大きな訓練にあって、それを立派に乗り越えていった人たちの体験や強い証、生ける予言者の言葉を学ぶことができますことをいつも感謝しています。そしてこの本によってひとりでも多くの兄弟姉妹が証を強めていくことができるよう、お祈りしています。(東京南ステーク部渋谷ワード部・安藤久美子・19歳)

管理監督会地域管理本部組織図(日本・韓国)

地域監督補佐
今井 一 男



地域監督
北村 正 隆



秘書
金子 十三江



財務部
部長 坂 井 圭



総合施設部
部長 岡 本 亮



韓国地区事務所
所長 モリスピアソン



資材管理部
部長 八木沼 修 一



福祉事業部



経理課
課長代理 鈴木 利 和



不動産管理課
課長 青 柳 弘 一



翻訳課
課長 黄 木 信



社会福祉課
課長 熊 沢 幸 雄



資産管理課
課長 小 林 正 幸



建築課
課長 角 山 照 雄



配送課
課長 本 田 八 八 八



女性図書部



会員記録統計課
課長 渡 辺 隼 龍



施設管理課
課長 大 久 保 浩



購買課
課長 西 連 寺 泰 彦



女性図書部



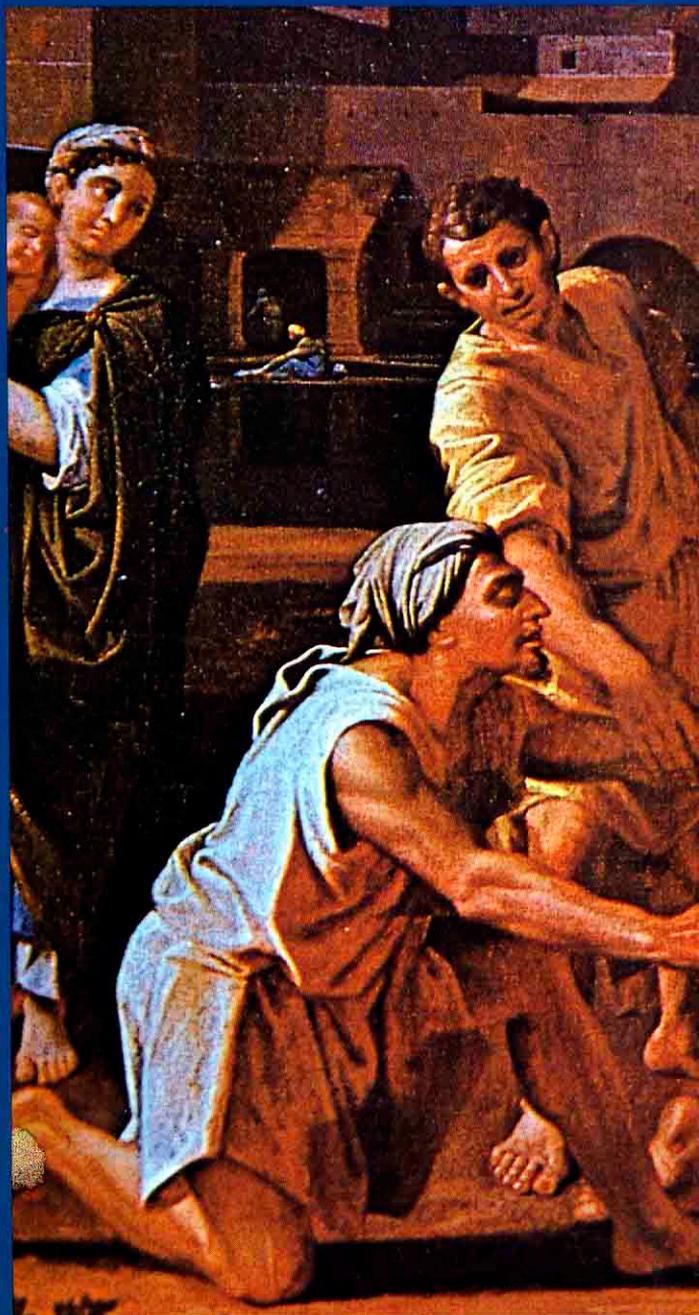
地域建築設計士
細 谷 佐



ハイアール
衣料センター
宮 昭 子



赤十字聖徳イエスキリスト教会
本部



目しいを癒すキリスト
ニコラ・プーサン（フラ
ンス・1594—1665）画